

4．点検評価と課題

4-1 点検評価委員会の報告

4-1-1 流動研究部門制度点検評価委員会

分子科学研究所の流動部門は錯体合成研究部門(昭和59年に設置)、界面分子科学研究部門(平成元年に設置)、有機構造活性研究部門(平成元年 - 平成7年の期間設置)、分子クラスター研究部門(平成8年に設置)からなる。設置以来13年を経過し存在意義の変化、制度運営上の問題点なども明らかになってきていることから、今回、流動部門制度の点検評価を行なった。具体的には、過去の流動部門経験者を対象とするアンケート調査、および、所外所内委員による討論を行なった。以下に委員会での討論とアンケートの内容を報告する。これらの結果をふまえて行った流動部門開発プロジェクト研究制度の提案については、次章の「将来計画と運営方針」の中で述べる。また、本委員会で指摘された本流動制度が多くの人に知られていないという問題点を解決する目的で作成したパンフレットを、巻末に添付する。

委員会開催の

日時 平成9年11月22日 午後1:30 - 4:30
場所 分子科学研究所 研究棟201号室

(1) 委員会の構成

出席者

所外委員

成田 吉徳	九州大学有機化学基礎研究センター	教授
三島 正章	九州大学有機化学基礎研究センター	助教授
稲永 純二	九州大学有機化学基礎研究センター	助教授
川副 博司	東京工業大学応用セラミックス研究所	教授
伊吹 紀男	京都教育大学	教授
林 浩司	岐阜大学地域共同研究センター	助教授
西尾 光弘	佐賀大学理工学部	助教授
木村 栄一	広島大学医学部	教授
久司 佳彦	大阪大学理学部	教授
増田 秀樹	名古屋工業大学	教授
小寺 政人	同志社大学工学部	助教授
中沢 浩	広島大学理学部	助教授
澤田 清	新潟大学理学部	教授

所内委員

上野 信雄	界面分子科学研究部門	教授
櫻井 誠	同	助教授
野々垣陽一	同	助手
櫻井 武	同	助教授
西 信之	分子クラスター研究部門	教授
田中 晃二	錯体物性研究部門	教授
宇理須恒雄	反応動力学研究部門	教授

オブザーバー

伊藤 光男	分子科学研究所	所長
齋藤 修二	分子科学研究所	教授

(2) アンケートへの回答

以下の36名の方からアンケートの回答をいただいた。

界面分子科学研究部門経験者

松島 龍雄	北海道大学触媒化学研究センター	教授
細野 秀雄	東京工業大学応用セラミックス研究所	助教授
佐藤 真理	北海道大学触媒化学研究センター	助教授
西尾 光弘	佐賀大学理工学部	助教授
川副 博司	東京工業大学応用セラミックス研究所	教授
伊吹 紀男	京都教育大学	教授
林 浩司	岐阜大学地域共同研究センター	助教授
上野 信雄	界面分子科学研究部門	教授
野々垣陽一	同	助手
松本 益明	界面分子科学研究部門	助手
吉田 明	豊橋技術科学大学	教授
植田 尚之	東京工業大学応用セラミックス研究所	助手

錯体合成研究部門経験者

小寺 政人	同志社大学工学部	助教授
御厨 正博	関西学院大学理学部	教授
武居 文彦	大阪大学理学部	教授
木村 栄一	広島大学医学部	教授
川泉 文彦	名古屋大学工学部	助教授
吉川 雄三	岡山大学理学部	教授
木田 茂夫	九州大学	名誉教授
水田 勉	広島大学理学部	助手
臼井 聡	熊本大学工学部	助手
増田 秀樹	名古屋工業大学	教授
久司 佳彦	大阪大学理学部	教授
澤田 清	新潟大学理学部	教授
池田 龍一	筑波大学化学系	教授
川本 達也	大阪大学教養部	助手
櫻井 武	分子科学研究所錯体合成研究部門	助教授
黒田 泰重	岡山大学理学部	助手
塩谷 光彦	分子科学研究所錯体触媒研究部門	教授
中沢 浩	広島大学理学部	助教授
福田 豊	お茶の水女子大学理学部	教授

有機構造活性研究部門経験者

新名主輝男	九州大学理学部	助教授
浅尾 直樹	東北大学理学部	助手
成田 吉徳	九州大学有機化学基礎研究センター	教授
三島 正章	九州大学有機化学基礎研究センター	助教授
稲永 純二	九州大学有機化学基礎研究センター	助教授

アンケート結果には本流動制度の実状が端的に反映されている。流動制度の体験者は、ほとんどの人が体験して非常に良かったと受けとめている一方で、実施段階で、制度の不備などによる苦労を経験している。流動を体験して良かった点としての主要な回答は(1)異なった文化や組織の体験、および分子研の人材や情報の集中、発信性などを活用した、研究の新しい展開、(2)予算的魅力、(3)雑務から解放され研究に集中できる点、などである。そして、本流動制度が日本の科学技術の発展と人材養成の観

点から、優れたものであることは、ほとんどの人が、流動により研究が大いに進展したと答えていることに端的に表われている。一方、本制度の問題点として特に深刻なものとしては(1)流動元で、流動した人の雑務のカバーを誰がするか、また、この問題があるため、教員の多い大学でないと流動に出られないという意見が多い。また、これ以外の問題点としての主要な意見としては(1)流動元の研究室の維持は必須であるが、これが非常に大変である、(2)学生の費用負担増、(3)流動元との往復が必須であるにも関わらず、十分な旅費が支給されない、(4)短期間での研究グループの立ち上げ、および流動元にもどってからの再立ち上げなどに対して十分な研究費が支給されない、などがあげられる。これらの改善策として望まれることとしては、(1)流動元に非常勤講師の枠をつける、(2)学生への経済的援助増、(3)大学院生を分子研でとれるよう、単位互換制度の確立、(4)流動元との往復の旅費の付与、(5)流動研究者への博士研究員ポストの提供などが上げられている。また、本制度を今後も分子研で続けて欲しいと思う一方、流動制度の全国の大学や研究機関への拡大については、非常に多くの回答が、不可能あるいは無意味であるとしている点も注目すべきである。即ち、本制度は現状、制度上の不備など多くの問題点を含んではいるものの、日本における科学技術の発展と人材養成に果たす役割は大きく、かつ、それが、分子研のような、特定の大学にかたよらない、全国共同利用の研究機関であるがゆえその機能が存分に発揮されていることを表していると言える。

なお、本アンケート結果全体についてまとめた資料を(5)節に添付する。

(3) 委員会討論の内容

伊藤： 分子科学研究所の流動部門は最初錯体合成研究部門が今から13年ほど前に設置され、その後、界面分子科学と有機構造活性が設置された。ここにおられる多くの皆様のご協力のもと、今日まで運営されてきましたが、運営にあたっては、色々な矛盾をかかえていることも事実であります。本日は、特に何等かの結論を出すというより、運営上の問題点などについて皆様の率直なご意見を伺いたいと思います。

宇理須： 先ず、流動制度の良い点あるいは問題点について、アンケート結果も参考に全般的に討論して下さい。

木村： 私は初期のころに着任した。制度そのものが周囲に全く知られていないので苦労した。出す方は分子研への協力のつもりなのに、分子研のほうは来させてやったという意識の人もいた。特に教授がポジションを移すことは大変であった。大講座制のところでは、教授がいなくなると予算が来なくなってしまう。

成田： 九大の有機化学基礎研究センターは流動をとりいれている。サバティカル的なものになることを期待したが、システムとして組み入れるのは非常にむづかしい。

田中： 大学間流動に対してサバティカルを大義名分にしているのか。

成田： 必要な研究分野にもかかわらず定員を補充できない部門を流動で補っているというのが実態である。小講座制の大学は人を出すのが非常に難しい。

川副： なぜ流動をつくったのか。分子研は流動で来る研究者に何を期待しているのかがはっきりしない。これは非常に重要な問題であると思う。

久司： 私の場合錯体化学研究所という、新しい研究所を作るために流動した。しかし、現在はそのような意義はなくなりつつある。

宇理須： 設置当初の目的がだんだん失われてきているのも事実だ。界面分子科学部門の場合も、当初は北大の触媒研究センターの改組を行うために設置されたが現在はすでにその役割は終了している。最近の意義は若い研究者の育成という点にあるように感ずる。

木村： そういう点では、助教授、助手の流動は意味があるが、教授の流動はそれほど意義が無いのではないかと。状況的にも難しい。

川副： 教授が必ず流動しないといけないというも問題である。

伊藤： 最近1:1:2を必ずしも守らなくても良い。来年の分子クラスターの場合1:2:1となっている。無理をしてまで、教授を入れなくても良いようになってきた。

川副： もう一回言いますが、流動の目的をはっきりさせることが非常に重要であると思います。

中沢： この制度を続ける理由は何か。流動を維持しなくてはいけないから、続けるのか。

伊藤： 機能しないのであれば、やめても良いと考えている。但し、私は続ける意義があると思っている。先日流動経験者のリストを見たが、全員第一線で大いに活躍しておられ、流動制度の意義が大きいと感じた。

久司： 若い人を育てる意義があり、ぜひ続けるべきだ。

伊藤： 続けたい。分子研所内でも続ける意志がある。当初のような政治的目的は無くなっており、純粋な研究交流の場としての存在意義が強くなっている。

西： 流動制度は科学の進歩に役立っていると思う。但し、教授の流動は難しい。

川副： 流動は人を育てる意義が大きい。人が交流するだけでも意味があるので続けて欲しい。分子研はそれだけ魅力のあるところだ。大学の共同利用研究所も交流の意義があるが、分子研の魅力は格段である。

宇理須： 流動をやめた方が良くとお考えの方はいませんか。私などは制度が廃止になってくれれば楽になるという気持ちが半分くらいはあるのですが。

伊藤： 世話をするほうは実に変です。12人の人がいるということは12箇所にもお願いにあがらなければならないのですから、それだけでも大変です。

木村： 流動という名称は良くない。折角、分子研教授という名誉な地位を得たのに、何となく流れ者というようなイメージがある。

宇理須： それでは、アンケート結果の中で特に深刻な問題点のいくつかについて、問題点ごとに議論していただきます。まず、流動元で抜けた人の授業や雑務の負担、との問題について。

伊藤： 流動元がいかに関っているかをお聞きたい。文部省に機会あるごとに本制度運営の大変さを訴えている。流動推進の費用は少しばかりついたが、流動派遣元に非常勤講師枠をつけることについては実現していない。

田中： 流動がほぼ決まりかけたのにつぶれてしまった例がある。大学院重点化をすすめているので、名簿に乗った人を他機関に出すのはもっての外というのが理由であった。これは、文部省は名簿に載っていてもかまわないと言っていることを知らないためだ。

川副： 流動元で併任辞令が得られると良いのだが。文部省から見ると空ポストはいっぱいあるのだが、実際に他の学部や、他大学の空ポストを利用して併任辞令を受け取ることは非常に困難である。

伊吹： 文部省がそれをできるようにしてくれると良いのに。

林： 人手不足のため、分子研と流動元との両方のデューティをこなした。私の時は事務レベルで減員の概算要求をだして大丈夫かということで問題が発生した。

西： 流動のパンフレットを作成して、周辺や事務部門の理解を深めるのも一案である。

木村： 併任なのかどうか等もそのパンフレットに書いて、実績を示すと、事務部門の方々の啓蒙にもなる。

中沢： 流動する人のデューティが増えるのはしょうがないとしても、残された人のデューティが増えるのは問題だ。ポスドクなどを流動元につけてもらえないか。

伊藤： 人をふやすことは非常に困難であろう。

上野： 非常勤のポストを流動元につけてもらえれば、流動元で授業ができる。

宇理須： 次に学生の問題について議論して下さい。学生が流動に付いて来ようとするとか、個人的負担が増えるとか、修士の単位をとるため実質1年くらいは元の大学にいないといけないなどの問題があるようですが。

上野： 流動元の学生の指導教官になれないし、もぐりで学生を連れて来た場合の出費も大変である。授業を分子研で行い分子研の単位を大学が認めてもらえると良い。単位互換の大学間協定が結ばれていると良い。

木村： 総研大の学生としてなら受け入れられるのでは。

斎藤： 総研大では東大との単位互換協定を検討しているが、東大の教官の中には反対される方もおられるようだ。

伊藤： 流動の教官は総研大の併任となるのは難しい。なれないのではなく、ポストの数に制約があって、流動でない専任教官でもなれない人がいる状況である。

宇理須： 今後リサーチアシスタントの制度が特別共同研究学生にも適用できるようになれば良いと思う。

宇理須： では次に研究サポート体制について議論して下さい。

川副： 大学でも将来的には助手は無くなると思っている。技術の継承の問題は大学院の学生で何とかやりくりしている。分子研の場合、技官の数も多く技術レベルが高い。

上野： 流動元大学での研究室の運営と分子研での研究を両立させるためにはそれなりのサポートが必要なのでは。

伊藤： 問題の根は深い。日本の場合、多くの場合研究予算に人件費の枠が無いため、研究費を外部から得てもそれによって人を採用できないところに問題がある。

宇理須： それでは予定の時間もせまってきましたので、最後に流動で人を出す場合に元大学が減員の概算要求を出さねばならないので困るという問題について議論して下さい。

伊藤： 文部省ではすでに流動による減員の要求は他に影響しないといってくれており、大学側が知らないために心配しているだけだ。

木村： この制度が知られていないなら、先ほど提案のあったパンフレットに理念も含めて詳しく説明すると良いのではないか。

川副： 公募もやると良い。パンフレットには事例を上げて実績を示せば理解が広まる。

三島： 流動元が遅れをとってはいけないと思うようなキャッチフレーズはないでしょうか。そのようなものをパンフレットに盛り込んで。

伊藤： 流動元へのメリットが無ければ流動制度はつぶれてしまう。

川副： 流動で出ていった人の埋め合わせとして非常勤講師のわくをつけるというのは最低必要なことと思うが、メリットなどを求めるというさもあり根性には賛成できない。

伊藤： 民間から教授になった場合や、任期付の助手には研究費の補助が出ようになった。このように研究者の流動性を高めることに文部省は努力を払っている。流動になったら同様な補助ができるようにすると良い。文部省は流動制度に注目している。

稲永： 流動で人を集めるのが大変である。若い人は来たがるが、事務の段階で制度が理解されていないためにつぶれることがある。

小寺： 私は本日、唯一の私立大学の在籍者だが、私立大学からも流動で来ることができると良いと思っている。

宇理須： 同様に民間の研究所からも流動で来れるようになると非常に良い。

増田： 新技術事業団の制度のようになっていると非常に魅力的だ。このままではあのようなところに人をとられてしまいかねない。

西尾： 減員の概算要求にたいする事務部門の反対はかなりあった。私の場合、研究分野を広げるのに役だったので流動制度はぜひ継続して欲しい。

久司： 減員の概算要求に2年後には帰ることを明記できると良いのに現在はそれが出来ない。

宇理須： それでは予定の時間となりましたので、ここで閉会させていただきます。皆様どうも有り難うございました。

(4) 流動部門制度に関するアンケート

1. これまでの流動制度で良かった点と問題点をそれぞれ3点ずつ挙げて下さい。

○良かった点

1. 異なった分野 文化、組織、制度との交流による新しい発見、
自覚、認識

異なった分野・組織を味わったこと(細野)

同世代の有機系研究者と交流できたこと(細野)

異文化交流(自分自身)(川副)

新しい人々と知り合いになれる機会が増える(上野)

大学とは異なる研究環境を一時的とはいえ体験でき、視野が広がること(野々垣)

再び大学に戻った際、大学の良い点、悪い点が見えることが期待できること(野々垣)

より広い視野で研究に臨むことができる(松本)

異種分野の情報収集と自分分野への反映が容易(吉田)

異分野の研究者と交流が持てたこと(植田)

全国ネットの研究交流が可能となった(豊田)

分子研は共同研究機構なので、様々な研究者の方々と知り合いになれた事(小寺)

流動本来の目的である教官の流動がなされて来た点はこの制度の存在意義を明確に示すものであり評価できる(御厨)

分子研であちこちの大学、研究所から赴任されて来た研究者と交流する機会を持つことができ知り合えたこと(御厨)

分子研で色々な研究室の研究の進め方等を窺い知ることができた(御厨)

様々な研究分野の人達と知り合いになれた(武居)

大学とは異なった制度の存在を知ったこと(木村)

慣れ親しんだ環境から、全く異なった環境に入ったこと(木村)

自分の視野を広げる機会であった事(川泉)

違う研究分野との交流(浅尾)

異分野との密接な交流により、新しい研究をスタートさせる転機となる(三島)

自分と同様の分野の研究者との交流は勿論のこと、他分野の多くの研究者との交流も持てた。(増田)

他分野の研究者と交流がもてたこと(澤田)

新しい人的・学問的な環境を得られた(特に世界的規模での)(黒田)

別の組織のシステム等に関する情報を得られた(黒田)

分子研を中心にサイエンティフィックな交流の輪が広がり、関連分野を概観できたこと(塩谷)

今まで知らなかった人と知り合いになれた(中沢)

教授会などを通して、異なった組織の運営方法、問題点などが分かった(中沢)

研究者としての視野が広がった(木田)

流動元である研究機関の改善すべき問題点が明らかになった(稲永)

2. 予算的補助の魅力。豊かな研究環境

研究費がエクストラに確保できたこと(細野)

恵まれた研究環境(研究費・設備・支援体制等)で研究に専念できたこと(伊吹)

1 異なった分野、文化、組織、
制度との交流による新しい
発見、自覚、認識

2 予算的補助の魅力。
豊かな研究環境

3 研究に専念できる

4 分子研の人材、情報の集中・
発信性(人的交流の促進、
集中的研究組織の構築)

5 環境の変化による刺激
活発な研究の雰囲気

6 新知識、新技術の導入

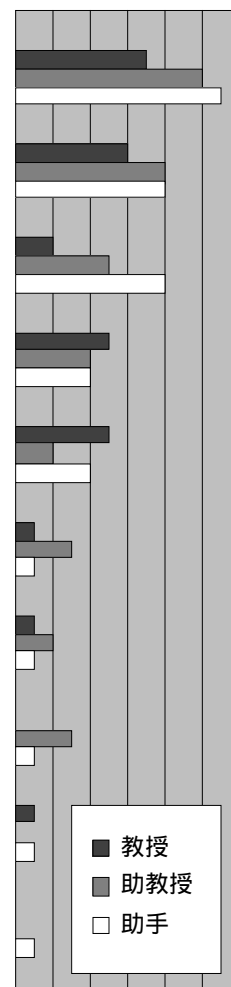
7 研究の幅の拡大、研究分野
の変更

8 講座制に縛られない自由な
雰囲気での研究

9 若手の研究者としての意識
向上

10 一流の外国人研究者との交
流

0 2 4 6 8 10 12



研究費、流動元の研究室との協力研究のための旅費等の面で
優遇された点(西尾)

研究のための豊富な利用設備、図書館の文献や業者の対応
が早い点等、研究環境が整っていた点(西尾)

予算的な補助が大きい(上野)

比較的大きな研究費が得られる(松本)

予算的なメリット(植田)

研究費がかなり自由に使えた(流動元の研究費に比べて)(豊
田)

研究費が多かった(小寺)

研究費が大学よりはるかに豊富で、購入したいと思っていた
装置が購入できたこと(川泉)

研究費が流動元より潤沢(吉川)

高度な測定機器が広汎かつ自由に使用できた(吉川)

大学に比べ比較的多い研究費(浅尾)

分子研にある多くの一流機器のお陰で、いながらにして研究の
遂行が出来た。(増田)

大学に比べ研究費が豊かであったこと(澤田)

研究費が豊富(川本)

研究費の増加(櫻井)
 岡大レベルの大学よりは資金的なメリットがあった(黒田)
 分子研の共同利用機器の積極的利用が可(吉田)
 研究環境(研究費、装置類等)に恵まれ、研究仲間も増えて研究に対する視野が広がった(稲永)
 市販の器具・試薬を出来るだけ利用するようにしたので、効率的に研究が進んだ(水田)
 装置、設備の利用機会増加(櫻井)
 3. 研究に専念できる
 流動後のポストを気にせずに研究に専念できる点(林)
 研究環境のいい所でじっくりと研究ができた(佐藤)
 専属の教職員に色々配慮いただき研究に専念できた点(西尾)
 助手のポストではデューティーがないため、自由に研究ができること(野々垣)
 研究に専念できること(吉田)
 研究に集中できたこと(植田)
 新鮮な雰囲気の中で研究に専念できた(武居)
 比較的自分で実験をする時間が持てて、“卒研学生”のようなフレッシュな気持ちを持てた(川泉)
 大学より少ない雑用(浅尾)
 日常的雑務が低減し、研究に時間的ゆとりが生まれる(三島)
 事務、学務等の“雑用”が非常に少ないこと(澤田)
 研究に専念できた(川本)
 研究時間の増えたこと(櫻井)
 授業、学生実験などがなく一週間をフルに研究に使うことができた(水田)
 学部講義等のobligationから開放された環境下での研究(臼井)
 4. 分子研の人材、情報の集中・発信性、人的交流の促進、集中的研究組織の構築
 共同研究施設の運営を見ることができ、他分野の研究者に多くの知人を得たこと(松島)
 最新の研究情報が取得できたこと(伊吹)
 分子研の諸制度、会議の進め方、先生方の考え方等々が直接学べた事(新名主)
 関連する分野の先生方を中心として、多くの先生方と知り合いになれた事(新名主)
 多くの研究上の人脈がつくれたこと(成田)
 多くの研究者の方との共同研究も出来、自分の研究の幅が広がった。また、そのお陰で研究内容が充実したものになった。(増田)
 人的交流の促進への寄与(久司)
 全国的な視野での人選、重要研究分野の選択への寄与(久司)
 集中的な研究の組織を構築できることへの寄与(久司)
 人事交流(池田)
 分子研の宣伝効果(池田)
 他部門、分野の人との人間的、研究的交流(臼井)
 それまでと異なる環境で、異なる研究者と一緒に研究できる可

能性がある(松本)
 国内外の研究者と話し合う機会が多く知人を増すことができた(木田)
 5. 環境の変化による刺激。活発な研究の雰囲気
 研究課題の意義の検証(学生)(川副)
 研究環境を変えることにより研究に刺激を与えられる点(林)
 より活発に研究が行える(上野)
 多数の同業研究者との共存で、活発な研究雰囲気下で研究できた(豊田)
 教官・学生共にある種の緊張感をもつことができた(吉川)
 国内外の研究者と話し合う機会が多く知人を増すことができた(木田)
 研究者としての視野が広がった(木田)
 研究環境(研究費、装置類等)に恵まれ、研究仲間も増えて研究に対する視野が広がった(稲永)
 分子研にいただけでさまざまな面で多くの刺激を受けた(川本)
 分子研のアクティブな研究グループに大いに刺激され、士気が上がったこと。特に親元の大学から来た学生にとっても大変良い経験だったようです(塩谷)
 異なった環境で研究ができ、刺激を受けた(中沢)
 6. 新知識、新技術の導入
 自分の研究分野に新しい技術(分子研にのみある)を導入できたこと(松島)
 放射光を用いる研究を新しく展開できたこと(松島)
 新しい知識が増えた(武居)
 新研究スタートのきっかけを作る(池田)
 親元の大学では不可能な高度な測定が可能になったこと(塩谷)
 7. 研究の幅の拡大、研究分野の変更
 研究分野の変更或いは研究の幅を広くすることができた(佐藤)
 研究活動の進展(川副)
 異分野との密接な交流により、新しい研究をスタートさせる転機となる(三島)
 新研究スタートのきっかけを作る(池田)
 8. 講座制に縛られない自由な雰囲気での研究
 講座制にしばられない自由な雰囲気があるので助手の立場で研究がしやすい(小寺)
 講座を離れて分子研の恵まれた研究環境の中で、独自の研究テーマで研究できた事(新名主)
 講座制度の枠に縛られない自由な研究活動が出来たこと(成田)
 独立した研究ができた(稲永)
 9. 若手の研究者としての意識向上
 私の研究室の助手、大学院学生の研究者としての意識を高めた(木田)
 分子研のアクティブな研究グループに大いに刺激され、士気が上がったこと。特に親元の大学から来た学生にとっても大変良い経験だったようです(塩谷)
 10. 一流の外国人との交流

来所する第一線の外国人研究者が多く、居ながら貴重な情報 1
が得られた(水田)

○問題点

1. 流動元との掛け持ちになり大変。元の研究室の維持が大変
流動元と掛け持ちになり時間的にきつい(細野)

流動元での研究活動との両立(川副)

流動元の大学に残した卒論生、大学院生の指導が疎かになっ
た(水田)

流動元大学での実質的な身分あるいは担当任務に戸惑いを
感ずることもあった(川泉)

経済的理由で研究指導している学生全員を分子研に連れて
来れないので、大学と分子研の二重生活になりハードな生活を
しいられる (新名主)

流動中に大学院学生の指導の為に併任が必要であった。ま
た、この期間中に新規の学生の受け入れが困難であった(成
田)

親元の大学の学生の指導が手薄になったこと(塩谷)

誰しも本務校での義務を完全に解放されて来ている者は究め
て稀であり本務校との兼務(講義、教室・講座の運営、残して
きた学生の研究指導等)を余儀なくされている。しかし、その旅
費は勿論のこと非常勤手当、研究費は本務校からではない。
(増田)

2年後には帰る研究室の活動の維持(木村)

大学の仕事と分子研の仕事を並列して行わなければならない、
その配分は助手である私には決められないこと(野々垣)

学生の面倒を十分見ることができなかったこと(植田)

流動元の様子が良く分からなくなったこと(植田)

2年後には帰る研究室の活動の維持(木村)

2. 学生の費用負担増、宿舎を望む

学生の下宿代(細野)

地方からの特別研究学生に対し、経済的な負担が大きい点(西
尾)

学生の滞在について、寮、宿舎の完備を望みたい(豊田)

流動のための学生用の宿舎がないため院生の経済的負担が
非常に大きい(御厨)

学生の生活面での負担が大きい(吉川)

教官と一緒に分子研に来た学生に対する旅費、引っ越し費用
(木田)

学生の移動に伴う経済的負担が大きい(三島)

移動に関する負担が大き(特に学生)、公私ともに犠牲になっ
た部分が大きかったこと(塩谷)

流動元から学生を移動させるための金銭的補助が全くない(中
沢)

教官・学生共に旅費が不足(吉川)

学生の岡崎滞在をよりやりやすくする方策-学生寮か?(福田)

3. 期間が短い

期間が短い(長期と短期があって良い) (松島)

流動する人にとっては流動期間は短く、少なくとも3年を一区切
りとした方が良い(西尾)

1 流動元との掛け持ちになり
大変
元の研究室の維持が大変

2 学生の費用負担増、宿舎を
望む

3 期間が短い

4 予算・実験設備の確保・準
備の面で大変、再立ち上げ
の大変さ

5 流動元にメリットが無い、
負担増、人的援助が無い

6 旅費の不足

7 個人的支出の増大、負担、
子供の教育

8 研究組織として助手、補助
者がいない
学生も連れて来にくい

9 流動制度に対する周囲の理
解不足

10 流動元に送り出す体制が無
い

11 書類上と現実に差が生じて
しまう、制度自体が整備さ
れていない

12 流動元が減員の概算要求

13 義理で参加しているケース
が多く、部門としてのプロ
ジェクトが組めていない

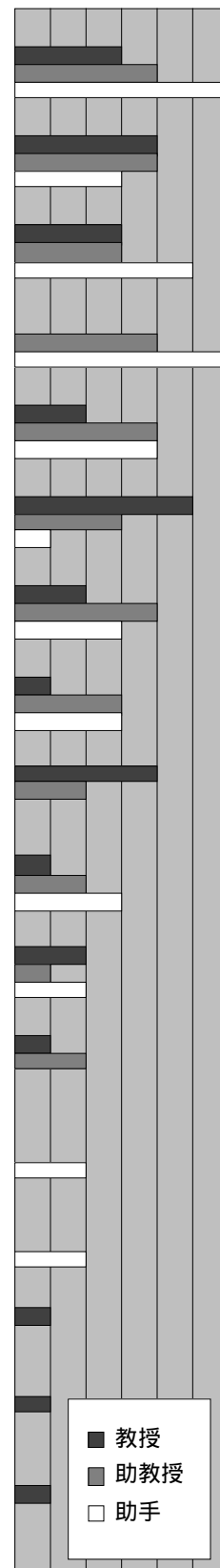
14 資金的援助が思ったより少
ない

15 流動中に行うことの事前打
ち合わせの不足

16 分子研の先生との交流が少
ない

17 助手の採用に支障が生じ得
る(3年間しぼるので)

0 1 2 3 4 5 6



異動時(最初と最後)にかなり手間がかかる割に期間が短い(松本)

流動期間が二年間というのはやや中途半端、しかしこれ以上延ばすのは流動元の都合で無理(木田)

短期間なので単身赴任生活を送らざるを得なくなり、ある意味では研究に専念する妨げともなっている(新名主)

2年間という期間の短さ(浅尾)

本当に充実した研究をするには、2年という時間は短すぎる。(増田)

期間が2年と短いこと(久司)

期間が短い(川本)

期間が短いので、新しいプロジェクトを始めても期間内に成果があがりにくい(小寺)

期間の問題。二年間でよいのか?場合によってはもっと長期はどうか?或いは、短期流動ということで、1つのテーマで1年間やるのはどうか(福田)

4. 予算・実験設備の確保・準備の面で大変、再立ち上げの大変さ

予算・実験設備の準備・確保の面でかなり大変である(林)

分子研での研究を立ち上げるのに2ヶ月以上かかった(水田)

実験器具、設備品の移動、運搬に関する諸手続き。費用の捻出(臼井)

実験が本格的に始まるまでの時間的損失(臼井)

流動先ですぐに研究の立ち上げが可能となる研究環境が整っていなかったこと(成田)

研究分野にも依るであろうが、実験室整備の経費及び時間的浪費が無視出来ない(三島)

移動に伴う時間的、経済的ロスもかなりある。(澤田)

研究室の立ち上げ、片付けの負担が大きく、学生も人数が限られるので厳しい状況であったこと(塩谷)

研究体制の短・中期的混乱(櫻井)

流動期間中における研究チームの縮小を回復するのに2年以上を要した(成田)

5. 流動元にメリットが無い、負担増、人的援助が無い

流動元との利害の調整(講義の問題)(稲永)

流動中の支援体制が弱いこと(久司)

元の研究室にかかる負担(川本)

親元の研究機関への人的援助がない(黒田)

流動元が欠員となり、それを補う人的補助が全くない(中沢)

流動元と掛け持ちになり時間的にきつい(細野)

流動の教員が移るため親元の研究機関に大きな負担がかかる(御厨)

流動元の大学に残した卒論生、大学院生の指導が疎かになった(水田)

流動元に対する十分なメリットがない(林)

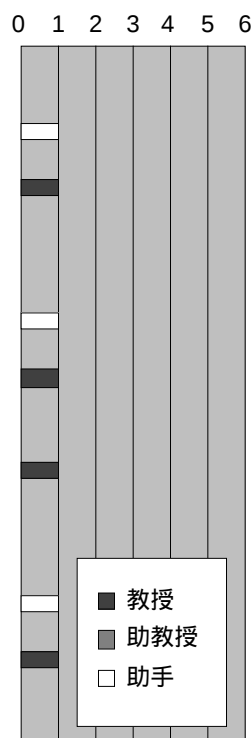
流動元への援助(福田)

6. 旅費の不足

旅費が足りない(細野)

本籍となる大学との間で公的な交流を行う旅費がない(客員教官のような旅費をつけるべき)(松島)

- 1 8 分子研でのデューティが無い
ため元の大学の仕事を
してしまう
- 1 9 流動元の研究活動の中断
- 2 0 教育システムの充実の必要
(大学院レベル)
- 2 1 親しい仲間の不足
- 2 2 制度に対する中央の大学の
協力が無い
- 2 3 汎用測定器が劣っていた
- 2 4 分子研で行うことがマイナ
スとなる研究が多い



旅費の持ち出しが多くなりすぎる(上野)

移動に伴う経済的負担(武居)

教官・学生共に旅費が不足(吉川)

流動元との旅費が出ないこと(木田)

誰も本務校での義務を完全に解放されて来ている者は極めて稀であり、本務校との兼務(講義、教室・講座の運営、残してきた学生の研究指導等)を余儀なくされている。しかし、その旅費は勿論のこと非常勤手当、研究費は本務校からではない。(増田)

流動元へ何度かいかねなければならないが、そのための予算がない(中沢)

流動元への出張旅費。わたしは毎週流動元に授業に行っていたが、その旅費はどこからも出なかった(福田)

7. 個人的支出の増大、負担、子供の教育

個人的な収入の面ではマイナスの方が多い(松本)

家庭(引っ越し、子供の教育就学等)(吉田)

流動のための引っ越し等の移動費用のサポートが不十分(御厨)

子供の教育(武居)

小生は流動教官となるため、転居の必要ななかったが、これは大きな問題ではないか(川泉)

個人的な転居に関する準備(臼井)

家庭の事情(子供の教育、転校、編入学等引越に伴う諸費用等)(稲永)

個人的(および家族)な負担、負荷(櫻井)

移動に関する負担が大きく、特に学生、公私ともに犠牲になった部分が大きかったこと(塩谷)

8. 研究組織として助手、補助者がいない。学生も連れて来にくい

研究組織としての教授・助手の組合せが出来なかったこと(伊吹)

教授-助手、助教授-助手セットの流動は現在不可能に近くなっている(豊田)

大学から連れてきた少数の学生以外に、マンパワーがなく研究を進める上で大変困った(新名主)

研究者(学生)確保の困難さ、単位の問題、引越代等生活費補助の問題(稲永)

学生が少なかったこと(院生全部は移動できなかった)(澤田)

人手が限られる(川本)

流動中の支援体制が弱いこと(久司)

我々の場合、学生諸氏が流動に参加してくれたが、もし彼等の参加が得られなければ研究の進展への影響が大。その点をカバーする人的援助がない(ポスドクなど)(黒田)

9. 流動制度に対する周囲の理解不足

流動制度の分子研内外での理解の不足と変質(川副)

大学側の理解に問題がある(大学の研究室の運営上)(上野)

大学当局において、流動部門制度に関する情報が余りにも欠如している(吉田)

移動元の大学では大変革期であり、本質的な不利益を蒙る可能性がある。(澤田)

流動元との利害の調整(講義の問題)(稲永)

流動教授の分子研内における位置づけ。研究面でも、あまりに分子研内での研究と離れすぎている(木村)

10. 流動元に送り出す体制が無い

大学の側に送り出す体制(システム)がない(佐藤)

流動元大学での実質的な身分あるいは担当任務に戸惑いを感じることもあった(川泉)

流動中に大学院学生の指導の為に併任が必要であった。また、この期間中に新規の学生の受け入れが困難であった(成田)

講座制ではないところから、分子研へ移り、その分の校費が完全にカットされたこと。自分の残った研究室の校費はゼロだった。かつ、Overhead分他教室へ借りができた(木村)

書類上と現実とに相違が生じてしまう(常駐でない場合特に)(松本)

流動元の様子が良く分からなくなったこと(植田)

11. 書類上と現実とに差が生じてしまう(制度自体が整備されていない)

書類上と現実とに相違が生じてしまう(常駐でない場合特に)(松本)

“試みとしての制度である”という色彩が濃いこと(久司)

人選が困難である理由により、部門内の構成がバラバラでまとまった研究が出来にくい(池田)

12. 流動元が減員の概算要求

流動のために減員要求など大学に見かけ上不利となる概算要

求をしなければならなかった点(西尾)

講座制ではないところから、分子研へ移り、その分の校費が完全にカットされたこと。自分の残った研究室の校費はゼロだった。かつ、Overhead分他教室へ借りができた(木村)

概算要求事項であることによる個人的な流動性の低下(櫻井)

13. 義理で参加しているケースが多く、部門としてのプロジェクトが組めていない

本来の流動研究の意味での一つの研究プロジェクトに集合するということができず、寄せ集めであり、義理で参画しているケースが多い。(増田)

人選が困難である理由により、部門内の構成がバラバラでまとまった研究が出来にくい(池田)

14. 資金的援助が思ったより少ない

研究費が不十分(新しい研究の立ち上げが困難)(池田)

資金的な援助がもっと多いものと期待していた(黒田)

15. 流動中に行うことの事前打ち合わせの不足

流動期間中に何を行うかに関する事前打ち合わせ不足(川副)

16. 分子研の先生との交流が少ない

分子研の先生方と情報交換をする機会が少なかったこと(伊吹)

17. 助手の採用に支障が生じ得る(3年間しばるので)

助手の採用についてかなり問題がある(合計3年間しばることになる)(上野)

18. 分子研でのデューティが無い(ため元の大学の仕事をしてしまう)

デューティーがないため、分子研の仕事もせず、元の大学での仕事ばかりをすることが可能なこと(自分自身の話)(野々垣)

19. 流動元の研究活動の中断

大学での研究室活動の中断(吉田)

20. 教育システムの充実の必要(大学院レベル)

教育システムの充実-講義、図書等(大学院レベルでよいが)(豊田)

21. 親しい仲間の不足

親しい仲間の不足(武居)

22. 制度に対する中央の大学の協力が無い

中央の大学がもう少し協力してくれてもよいように思う(吉川)

23. 汎用測定器が劣っていた

汎用の測定機器が、大学院重点化が進んでいる大学より劣っていた(水田)

24. 分子研で行うことがマイナスとなる研究が多い

分子研で行うことがプラスにならない(むしろマイナスになる)研究が多い(池田)

講座制ではないところから、分子研へ移り、その分の校費が完全にカットされたこと。自分の残った研究室の校費はゼロだった。かつ、Overhead分他教室へ借りができた(木村)

部門単位でなく、若手のみにかぎる制度があっても良い(松島)

2) 流動を経験されたことによってその後の研究活動が進展しましたか。

1. 大いに進展した

大いに進展した、分布測定 → 分布測定に進展し世界初の TDS-TOFをつくることができた(松島)

流動によりマシンタイムが大幅増となり 実験データが蓄積できた点や研究に関する多くの情報が得られた点などはその後の研究に大いに役立った(西尾)

非常に進展した。また、新しい研究分野に参入できたことも大きな成果である。分子研の共同利用機器を利用する上で(心理的) 障壁がなくなり、積極的利用が可能となったことも大きい(吉田)

非常に大きく展開できた(臼井)

違う研究分野の人達との交流によって研究に対し違った角度から考えるようになり、大いに進展した(浅尾)

研究内容に幅が出来、広い視野から自分の研究を見渡すことが出来るようになり、研究活動は明らかに進展した(増田)

新しい研究テーマをスタートさせることが出来、大いにプラスになった(川本)

分子研での新たな人との出会いにより、新たな刺激を受けた。これが、その後の研究活動に大いに役立っている(中沢)

研究活動上大きな刺激を与えることができ、研究に幅、広がりを与えることができた(林)

進展しました。2年間、研究中心に分子研の雰囲気につれ、進んだ機器を活用し、研究の水準は上がりました。特に、他分野の方との密接な交流が出来たことは、何物にもかえ難い貴重な経験でした(久司)

分子研で立ち上げた装置により、研究活動は進展した。また、人的な面でもつながりが出来たことは大変ありがたかった(黒田)

2. 進展した

修了して数カ月なので具体的にはない。しかし、時間が経つにつれて外国留学と同様にプラス面の効果があると思う(細野)

進展した、1) 必要な装置を自分達で作ることを経験したこと、及びそれを利用したデータ収集が可能となったこと、2) 異なる科学文化との交流、特に学生にとって意味が大きい(川副)

研究を発展させる素地はできたと考えている(伊吹)

進展すると考えられる(現在流動中のため、予想を書いた) 上野)

流動期間中に購入した機器を使うことにより研究が、効率的に進んだ。さらに、自由に使える時間が増えたことにより、それまで構想を持っていたテーマを具体化したり、新たな研究分野に目を向けることが出来た。その結果新しい研究テーマを始める事が出来た(水田)

新しい観点からの研究がスタート出来た(三島)

私は1年しかいなかったのですが、この1年間主に研究室の立ち上げに時間を注がれてしまいましたが、この経験はその後の研究活動に大いに役立ちました(御厨)

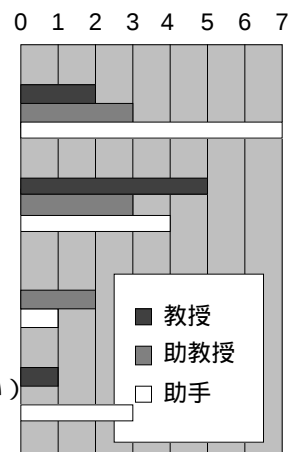
研究上の視野が広がった(武居)

1 大いに進展した

2 進展した

3 やや進展した

4 不明(流動中の人が多い)



いろいろな学問分野の考え方が理解できるようになった(武居)
他部門の研究者との共同研究により、これまで不得意であった分野に道が開けた(澤田)

進展あり。この間に新分野の研究がスタートしました(池田)
研究のレベルが変わったかどうか(向上したかどうか)については、自分で判断するのは難しいが、少なくとも流動期間中に視野が広がり、研究分野の幅が広がったと思う。また、以前より研究者との交流の輪が広がったので、それにより刺激を受けたり、情報を得たりしたことが、研究活動を進展させた要因になった(塩谷)

一時的には停滞したが、新しい研究分野を切り拓く大きなきっかけになった(稲永)

3. やや進展した

“ 進展した ” といいたいのが、“ それなりに進展した ” というところか?しかし、これは流動制度より私自身の能力のため。但し、共同研究を行った外国人研究者のhome countryを招待により訪ねることができた(川泉)

進展した部分もあるが、切り捨てなければならなかった部分もある(佐藤)

化学のより広い分野が理解できるようになったとは思いますが、分子研での経験がその後の研究活動に大きく役立ったとは思いません。分子研の先生方と共同研究が出来ればよかったのでしょうか。そういう余裕が持てませんでした。むしろ外に出てから共同研究がやりやすくなった気がします(新名主)

4. 不明(流動中の人が多い)

現在流動部門に所属しているため解答不能(野々垣)

流動期間終了後5ヶ月ということで、まだ実感できない(植田)
一応の成果はあったと思います。しかしマイナスの面もあって、よくわかりません(木田)

教授にについて行った、助手の立場だったせいもありよくわからなかった(川本)

3 流動教官になるにあたって、周囲の理解が得られ易かったですか。

1. 非常に困難であった

かなり困難であった、1) 感情的な反発(本務を放り出してサバチカルに行くとは何事か) 2) 大学の概算要求を提出する際の定員充足との関係、3) 流動が1位(or特)で概算要求に出てくることの他の要求事項への影響(ともに誤解に基づく)(川副)

大変厳しい状況であった(林)

極めて困難である(上野)

ポストの移動が必要なためかなり困難(松本)

なかなか難しい状況であった。少人数のスタッフで一人の教授が抜ける事は、他の教官への負担が大きくなり口には出しては云わないが、迷惑な事をしてくれたという感じがあった(福田) 全然だめ。白い目でみられた。分子研に行ってもあまり相手にされなかったようだ(木村)

私の場合、併任でなく転任であったので、流動の2年間、そのポジションをどう保持するかで事務との間で問題になった。結局、2年間のみという紳士協定(誓約書を交わしたと聞いている)で教務職員を採用してポジションを埋め、私が帰ったときにその方に移っていただいた。(その時の就職探しは相当大変だったようです)周囲の教官の反対もかなりあった(塩谷)

2. 困難であった

正直に言いますと、理解を得るのに多少の努力が必要でした。理由は流動制度が知られていない、定着していないことに起因しています(細野)

容易ではなかったが、最終的には関係者全員の理解を得た(伊吹)

得られにくい。理由としては、(1)流動制度が大学では良く知られていないこと、(2)助手は併任でないため、大学の定員が減ることになる事など(植田)

公私共に容易ではなかった。しかし、最終的には所長の決断が大きかった(武居)

私は当時助手でしたので詳細は知りませんが理解は得にくかったと聞いております(臼井)

私自身には分子研で研究できる大きなメリットがありますが、所属講座の先生方には、むしろマイナスに働きますので理解が得られにくかったと思います。研究指導をしていた学生の中で積極的に分子研に行きたい人は少数で無理にお願いして分子研に行ってもらいました。また、子供が中・高校生であると家族一緒に移るのは困難だと思います(新名主)

学生実験などの負担が他の研究室の先生に余計にかかるなどの点であまり好意的ではなかったようだ。(浅尾)

流動教官となることについて教室内の十分な理解を得る努力がなされずに進められたため、多くの問題を残した。また、十分な理解が得られたとは思えない(成田)

簡単ではなかったと思います。最初から併任という条件付きで併任を断れば認められなかったと思います(池田)

我々の場合には特別な事情(改組)があったので問題はなかったが、一般的には理解が得にくいと思う(佐藤)

3. まあまあ

我々の場合は特殊事情があったので、比較的問題はなかった。

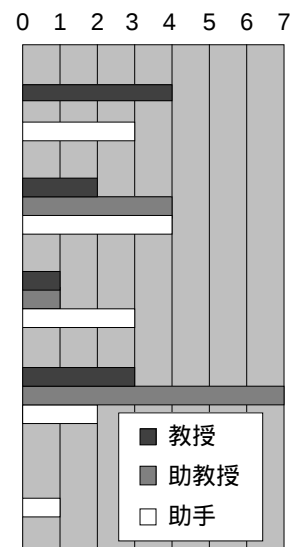
1 非常に困難であった

2 困難であった

3 まあまあ

4 得られやすかった

5 良くわからない



また、教室のサイズが十分大きかったので、他の講座の負担増は比較的少なくてすんだ(三島)

小規模な大学であるため、講義や各種委員会の委員などに関して他の教官が負担増となる点で問題を残したが、研究の活性化の点で教室から理解が得られた(西尾)

教官サイドへの説明およびその後の処置に対し、理解を得るのはそれ程困難ではなかった(流動期間中の研究室数の確保、配属学生への処置、研究指導、講義など)しかし、事務サイドでは、概算要求への悪影響の可能性を考えてか、理解は難しかった(吉田)

教授が基本的に流動に賛成していたことと、偶然にも流動の開始時と研究室に助手のポストが回ってきたので、流動元の研究室内で理解は容易に得られた。一方、学科内では、学生実験を担当できる助手が減るので他の教官の負担が大きく増えた。このことに関して多くの批判的意見を耳にした(水田)

私の場合は、直接分子研採用で来たため、全く問題はなかった。しかし、採用されるべき名大理の方には迷惑がかかったかもしれない。最近の傾向を見ると、研究が出来るということ以外に、良い意味での箔がつくとの見解から、本人は行きたいが、周りがいろいろな意味で足を引っばるケースが多いようである。両者に何らかのメリットがあるように考えていただけるとありがたいです(増田)

4. 得られやすかった

研究所の廃に、新組織をつくるための再教育の意義が大きかったので理解は周囲から生じた。小生は分子研がどこにあるか当時知らなかった(松島)

教授からの推薦であったため障害なし(野々垣)

助手の身分だったので、得られやすかったのだろ(御厨)

比較的容易であった(川泉)

学部長はじめ大いに理解してくれた(吉川)

割合良く理解して頂けた(木田)

得られやすかったと思(稲永)

周囲のご理解と暖かい支援が、私の何よりの励ましとなりました

た。私の方からも、流動教官としての実情を出来るだけ周囲の方々に伝え、その理解を頂くよう努力をはらいました(久司)
私の場合、ほとんどきれつなくスムーズに流動が認められた(澤田)

流動ポジション自体が理解されていないこと、共同研究者がいないこと、などにより比較的障害は低かった(櫻井)
皆様に協力していただき問題はなかったと思う(黒田)

施設長が出向かれて直接説明していただいたお陰もあり講座、学科、学部、事務の各々のレベルにおいて、流動に対する理解が得られ、比較的好意的に処理していただくことができた。従って、事務処理上のトラブルはほとんどなかった(中沢)

5. 良くわからない
教授にうついて行った、助手の立場だったせいもありよくわからなかった(川本)

4 流動期間中、流動元の講座(研究室)運営には大きな問題が生じませんでしたか。

1. 大きな問題が生じた

極めて大きな問題がありました。現在の体制(1-1-1)で1-0-1 or 0-1-1で完全に流動したら流動元の活動は停止してしまいます。よって、両方を往復せざるを得なくなり、助手なしで流動元を支えなくてはなりません(細野)

学科人事予算面で、一切シャットアウトされ、大きな問題であった。後遺症の回復に、がむしゃらに努力し、5年位かかった(木村)

流動元講座への人的補助が行われなかったため、残った教官への負担がかなり大きくなり、おそらくその為と思われるが、体調をこわし入院した教官が出た。幸い大事には至らなかったが、かなり責任を感じた。流動で移動する教官も大変であるが、流動元に残った教官の負担も相当であり、流動問題を考える際、無視できない問題である(中沢)

講座制を採用しており講義、実験器具等で上司に大きな負担をかけた(西尾)

教授1、助手1の体制で研究室運営を行っていたため、研究テーマの性格上残留学生がいたが、研究指導、研究予算などにおいて、残留学生が不利な状況になった(吉田)

留守を守ってくれた教官に講義の代行などで大きな負担をかけた(吉川)

流動元の運営には、教授と助手が当たった。流動した教官が研究指導をしていた学生の大半は、流動元に残したので、流動元の教官の負担は倍加した。流動元の教官が体調を崩したこともあり、流動元の研究室の運営が一時危機的な状態になった(水田)

流動元講座には流動を支援する体制がなく、完全に機能停止に陥った。流動教官を派遣する流動元において十分な支援体制のあるところから流動教官を派遣すべきである(成田)

2. 問題が生じた

実際には私は動かなかったため、その点では問題は生じなかった。研究室の助手が欠けていることが最大の問題であった。(対学生の研究指導、実験技術の伝承、研究費申請)(川副)

流動元の研究室は結局のところ、遠隔操作、指導をすることになり細部にわたる指導ができなくなった(林)

問題が生じている(上野)

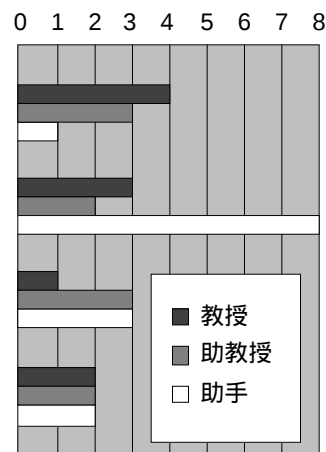
大学の助手という立場は、装置のメンテから始まり、学生たちと実際に実験を行い研究を進める実働的な性質を持っています。大きな問題とは言えないかも知れませんが、トラブルが発生した時などは、私がいなければ復旧にかなりの時間がかかります

1 大きな問題が生じた

2 問題が生じた

3 まあまあ

4 全く問題なし



(野々垣)

助手がいらないということで、学生の指導等には問題があった

(植田)

非常に大きいとは言えないが大学院生の指導が不十分になり、学生は不満を持っていたようです(池田)

関連する分野の教官に講義や委員会など負担を強いた(櫻井)

流動元に大きな問題が生じるので、その解決のために、約1ヶ月位(/ 年)流動元にかえて学生指導等に当たった(黒田)
学生の移動は負担が大きかったり、単位取得の関係で、ごく少数しか流動出来ないため、殆どの学生を流動元に残さざるをえなかった。そのため、学生の指導がかなり手薄になり、流動元の教官の負担がかなり増えた。移動できた学生はDrコースのみだったので、残された学生は悲惨であった。(特に私の場合、同研究室の教授と一緒に移動したので、残された人達はいろいろな面で苦労したと思われる)(塩谷)

一部の助手、院生は被害を受けたと思っていた。しかし、運営に決定的な問題を与えたとは思わない(武居)

助教授(講師)を中心に、教務関係には対応して頂き、研究面は大学院生も分子研に来ましたので、分子研の方が主となって運営しました。しかし、"全体の運営"には大きな迷惑をかけてしまいます。例えば、"入試問題の作成"etcに参加できぬこと...など(久司)

残してきた学生の研究指導には、少なからず問題はあったが、重大な問題は生じなかった(澤田)

当時、学生がほとんどいない教養部だったせいもあり、研究室の運営には大きな問題はなかったと思う。ただ、授業(学生実験)の面で、他研究室の教官に負担をかけた(川本)

上記同様の理由で、私の場合は問題はなかったと思われるが、実際、スタッフが一人いなくなるわけだから多かれ少なかれ問題が生じるのは当たり前である。来年、当研究室（名工大）から助手が流動で移動することがきまっているが、これまで彼がやってきたことが他の者では動まらないことから、兼務（表向き）はできないので、彼の仕事量は増加するのみ（余儀なくさせることになり）そうである（増田）

3. まあまあ

教育への関与が少なかったので問題は少なかったが、一般にはいろいろな問題が生じると思う（佐藤）

有能な共同研究者のおかげで、それ程問題は生じなかった（川泉）

それ程大きな問題はなかった（御厨）

助教授が有能だったので大きな問題は生じなかった（木田）
当時流動元の講座は助手のポストは他講座より多かった関係もありまして大きな問題にはならなかったようです（臼井）

講義、学生実験、学生の研究指導等、所属講座の先生方は大変だったと思います。しかし、特に「大きな問題」はなかったと思います（新名主）

スタッフが一人抜けるので当然学生の指導などで負担をかけてしまったと思われるが、特に大きな問題にはならなかったようだ（浅尾）

さほど問題とならなかった（三島）

4. 全く問題なし

我々の部門は分子研で立ち上げられたのです（松島）

特になし（伊吹）

現在のところ、流動元において研究を続けているため特に生じてない（松本）

研究室的には何も問題はなかった（福田）

助教授の先生がしっかりされていたので、そのようなことはなかった（小寺）

大きな問題は生じず、かえってうまくいったようである（稲永）

5 流動元に帰られた後に、流動による弊害が現れて来ましたが、また、それはどのような弊害ですか。

1. 弊害なし

大きな弊害はありません（細野）

流動の途中で他所に移ったので何とも言えないが、流動によって結果的には良い影響をもたらしたと判断する（御厨）

流動期間終了後は、所属講座を離れる事になっておりましたので特に感じませんでした。一般論として、2年間留守すると、所属講座の先生方と以前の関係に戻るまで、長時間必要だと思います。（新名主）

特になし（浅尾）

大きな問題はありませんでした。私が学内で出した要求に対して、先方は「これまでに学科・学部にいる迷惑を掛けたから」という理由で反対や拒否されたことはありません（池田）

2-1. 予算面のギャップ、環境のギャップ

予算面では大きな開きがあるため、研究を継続、発展させることが困難であった点、大学では改組などの大きな変化が流動期間中にあり、復帰後、情報不足のために対応することが難しかった点（西尾）

分子研の大型機器が思うように使えなくなったこと。それ以外には弊害はなかった（塩谷）

特にあるとは思えないが、いろんな諸手当・書類上のこと等の手続きが遅れる（増田）

2-2. 留守中の改組など

流動期間中に流動元の方の組織などすっかり変わってしまったので、慣れるのに苦労している（植田）

流動不在中に他の研究分野の人事が進み、一応話は伝えられてはいたが、一瞬浦島太郎的状况があった（福田）

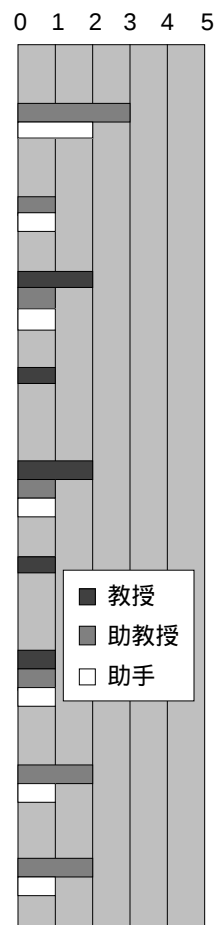
流動元が変化することに疎くなっていた（川泉）

流動の間に少数ではあるが制度で元に戻ってしまったことがあった（吉川）

2-3. まわりに「かり」を作る

問題が生じる予定である。流動で流出中に大学院の改組があるため、大学のポストをさらに借用し併任する必要がある。この

- 1 弊害なし
- 2 弊害があった
 - 1 予算面のギャップ、環境のギャップ
 - 2 留守中の改組など
 - 3 まわりに「かり」を作る
 - 4 帰ると新規立ち上げのようになる
 - 5 大学院担当などの役割を失うことになる、給料の減額
 - 6 雑務の集中、借りの返し
 - 7 周囲の理解不足（諸々のマイナス）
- 3 わからない



結果、流動終了後、しばらく助手のポストがつかない事になってしまっている。又、一部非常勤予算を使用して講義を行うため、まわりに「かり」をつくったことになってしまっている（上野）

2-4. 帰ると新規立ち上げのようになる

全く新しい研究室の立ち上げでした（松島）

特にないが、強いて言えば研究室に配属学生がいなくなったた

め、新規に研究室を立ち上げていく必要があった。ただし、研究室の面積、研究機器などはそのままにしておいてもらったので、非常に助かった(吉田)

指導学生が途絶え、新規にグループを形成するのに時間を要した(三島)

“場所をかわる”ということは“流れを一度止めて”ということになります。教授は、表にはあらわれぬ用事が沢山あり、それも“STOP”となります。それを再び立ち上げて流れにのせる迄が一番大変でした(久司)

2-5 大学院担当などの役割を失うことになる 給料の減額
流動前に大学院博士課程担当教官であったが、流動から戻ると担当教官枠は他の教官で占められており、大学院非担当教官となってしまった(給料は大幅に減額)(福田)

2-6. 雑務の集中、借りの返し
授業、大学の雑務の負担に若干しわ寄せが来た(木田)
流動元の学科内での係りの分担が、2年間の流動期間中スキップされていたので、復帰後にそれが集中し研究活動に支障となった。海外留学の機会をしばらくの間、見送らざるを得なくなっ

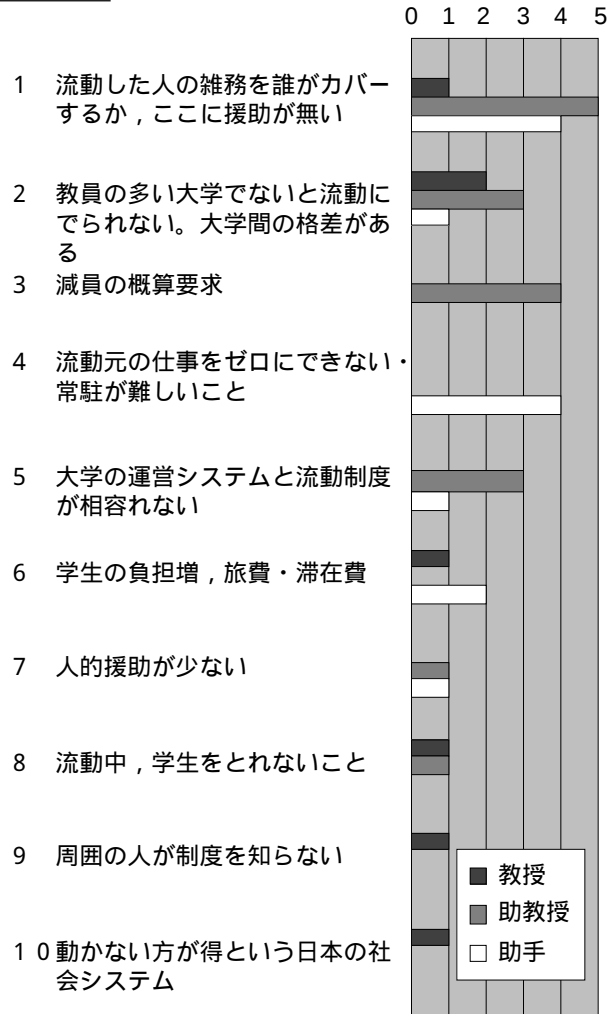
た(水田)
流動期間中は学科や講座から選出される各種委員が必然的に免除される。しかし、その反動で、帰ってからは一度期に種々の委員をやらされた。断るわけにもいかず、大変忙しい思いをした(中沢)

2-7. 周囲の理解不足(諸々のマイナス)
定員削減との絡みで流動元へ帰る事への風当たりが強かった。流動元へ帰った後に「流動部門への転出は外国留学と同等とみなす」と言われた(臼井)
流動中の学部改革において、不在中発言権がなかったため、幾分研究条件(部屋面積等)が悪くなっていた(澤田)
各種申請等、順番待ちであったものの中で、履歴がクリアーされたものもある(澤田)

3. わからない
現在、流動部門に所属しているため解答不能(野々垣)
他大学に転出したために不明(成田)
流動元に帰ると同時に、他に転出したため弊害の有無はわからない(稲永)

6) 流動制度の最も深刻な問題点をもたらす原因は何であるとお考えですか。

1. 流動した人の雑務を誰がカバーするか、ここに援助が無い
流動でぬけた研究者が流動元でかかえていた仕事(講義、ゼミ等)を誰がカバーするかという点(林)
流動元の教官に負担が増えることは必ず流動教官に何らかのはねかえりがある。これは当然のことで、これを避けるためには人的あるいは経済的に流動元の大学、学部、学科へ援助が必要となる(福田)
流動元の研究室、学科が人手不足となる(川泉)
STAFF級の不足、教官の雑用が多すぎる(池田)
流動元への人的補助が全くないこと、流動で出た教官の負担を、講座に残った教官が補わなければならないのでその負担は倍増する(中沢)
特に小さな大学では、定員減は大きな問題であると考えられる。(授業、雑務等が他の教員の負担に)(澤田)
流動される先生の欠けた穴を、残りの先生方で埋めなければならない点が一番大きいと思います。助手やsupporting staffが増えない現状で、ただでさえ多忙な先生方にさらに労働強化をしている事になります。特に所帯の小さな学科では深刻だと思います(新名主)
流動元に残した卒業生・大学院生の指導が困難になったことが、挙げられる。流動してポストは移っているとはいえ、流動元ではやはり研究室のスタッフの一人として認識されているので、卒業生・大学院生の研究指導の責任がある。このため、出来るだけ多くの学生と共に流動したかったが、授業単位の振り替えが一部しか認められなかったこと、学生寮に相当するものがないので、転居や長期滞在の際に学生たちに大きな経済的負担を強いること、の2点のために僅かな数の学生しか分子研に来ることが出来なかった。結果的に、流動した教官、流動元の教官、ともに様々な点で大きな負担となった(水田)
流動したあとの“すき間”を埋めるシステムがないということ。や



は、一方通行ではなく、双方向へさらに3group～それ以上の間の流動というシステムが必要かと思います(久司)

大学にポストを残した形(あけた形)で出ることだと思う(川本)

2. 教員の多い大学でないと流動にでられない。大学間の格差がある

流動に出られるのは教員の多い大学で教員の数が少ない大学では教員1人あたりの義務が多いので流動に出られない。流動制度の問題ではないと思いますが、大学間に不公平感があります(小寺)

流動制度に教員を出せる余裕のある研究機関は旧七帝大の国立大を始めとする比較的大きな所に限られており、これを小さな研究機関に当てはめようとすればそれこそ深刻な問題を引き起こすことになるだろう(御厨)

流動へ人を出した事によるひずみが小さな大学より小さいと思われる大きな大学がもっと積極的に協力すべきだ(吉川)

流動される先生の欠けた穴を、残りの先生方で埋めなければならない点が一番大きいと思います。助手やsupporting staffが増えない現状で、ただでさえ多忙な先生方にさらに労働強化をしている事になります。特に所帯の小さな学科では深刻だと思います(新名主)

特に流動元の組織が小さい場合他の教官へのしわ寄せが大きくなる点である(稲永)

流動が最も効果を発揮するのは旧帝大のような大学からの流動でなく、比較的小規模な大学(又は学部、学科)だと思います。しかしその様なところから流動するのは事実上難しい事が多い(木田)

3. 減員の概算要求

小さな大学であるため、大学の規模を發展させていく必要があるが、流動のためには減員要求など大学に見かけ上不利となる概算要求をしなければならなく、大学のみならず文部省サイドでさえ理解を得ることが難しい点(西尾)

特に小さな大学では、定員減は大きな問題であると考えられる。(授業、雑務等が他の教員の負担に)(澤田)

ポジションが各大学や研究機関に属しているため、概算要求をとまうこと。大学が講座、学科、学部という単位で固定的に運営されていること(櫻井)

流動制度実現のために取る了解事項が多いこと。本人は流動に積極的であっても、講座、学科、学部が種々の理由で認めない場合は実現できない。転任の場合は基本的には本人の意思決定によりことが進むが、流動の場合は定員増減を伴うため、個人レベルではことが進まないところが問題点(中沢)

4. 流動元の仕事ゼロにできない・常駐が難しいこと

大学に戻る以上、大学仕事をゼロにすることはできず、事実上板挟みになっている(野々垣)

流動元の方でも研究活動やその他の雑務を期待されること。特に助手の場合は併任ではないので住居等の問題も大きい(制度上というよりは、研究室側の運営上の問題ともいえる)(植田)

流動元に残した卒論生・大学院生の指導が困難になったことが、挙げられる。流動してポストは移っているとはいえ、流動元ではやはり研究室のスタッフの一人として認識されているので、

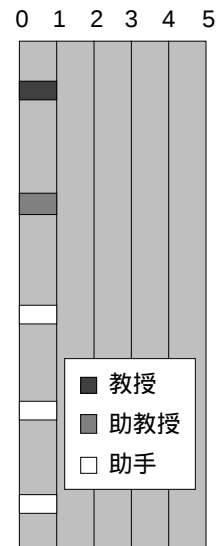
1 1 大学のポストを使うこと

1 2 大学改革の進行と矛盾が生ずる

1 3 四年生の流動が認められない

1 4 中途半端な予算・年限

1 5 流動に対する消極的な姿勢



卒論生・大学院生の研究指導の責任がある。このため、出来るだけ多くの学生と共に流動したかったが、授業単位の振り替えが一部しか認められなかったこと、学生寮に相当するものがないので、転居や長期滞在の際に学生たちに大きな経済的負担を強いること、の2点のために僅かな数の学生しか分子研に来ることが出来なかった。結果的に、流動した教官、流動元の教官、ともに様々な点で大きな負担となった(水田)

現在のように常駐でない状態を許すと、流動教官を得ることは容易となるが、虚偽の書類ができてしまうため問題である。かといって、常駐のみとした場合教官を得ることが難しくなるかも知れない。非常駐の場合、極端な場合、お金だけとなりかねない(松本)

5. 大学の運営システムと流動制度が相容れない

流動元に残した卒論生・大学院生の指導が困難になったことが、挙げられる。流動してポストは移っているとはいえ、流動元ではやはり研究室のスタッフの一人として認識されているので、卒論生・大学院生の研究指導の責任がある。このため、出来るだけ多くの学生と共に流動したかったが、授業単位の振り替えが一部しか認められなかったこと、学生寮に相当するものがないので、転居や長期滞在の際に学生たちに大きな経済的負担を強いること、の2点のために僅かな数の学生しか分子研に来ることが出来なかった。結果的に、流動した教官、流動元の教官、ともに様々な点で大きな負担となった(水田)

これまで各大学ごとにそれぞれで完結するシステムとしてつくり上げられてきた大学の運営システムと流動制度が多く点で相容れないことに原因がある(成田)

流動したあとの「すき間」を埋めるシステムがないということ。やはり、一方通行ではなく、双方向へさらに3group～それ以上の間の流動というシステムが必要かと思います(久司)

流動制度実現のために取る了解事項が多いこと。本人は流動に積極的であっても、講座、学科、学部が種々の理由で認めない場合は実現できない。転任の場合は基本的には本人の意思決定によりことが進むが、流動の場合は定員増減を伴うため、個人レベルではことが進まないところが問題点(中沢)

ポジションが各大学や研究機関に属しているため、概算要求をともなうこと。大学が講座、学科、学部という単位で固定的に運営されていること(櫻井)

6. 学生の負担増 旅費・滞在費

学生の移動に伴って発生する諸問題。4年生の流動が認められない。修士課程の学生は1年しか委託院生として移動出来ない。学生の旅費、滞在費が手当出来ない。(三島)

流動元に残した卒論生・大学院生の指導が困難になったことが、挙げられる。流動してポストは移っているとはいえ、流動元ではやはり研究室のスタッフの一人として認識されているので、卒論生・大学院生の研究指導の責任がある。このため、出来るだけ多くの学生と共に流動したかったが、授業単位の振り替えが一部しか認められなかったこと、学生寮に相当するものがないので、転居や長期滞在の際に学生たちに大きな経済的負担を強いること、の2点のために僅かな数の学生しか分子研に来ることが出来なかった。結果的に、流動した教官、流動元の教官、ともに様々な点で大きな負担となった(水田)

学生の経済的状況。学生を特別学生として分子研に連れてきた場合の新しい下宿の確保、礼金・敷金の補充など深刻である。また、学生を時折、分子研に呼び寄せる場合、旅費・滞在費の支給に非常に困った(吉田)

7. 人的援助が少ない

人的および資金(研究)面からの援助が少ない(黒田)

流動元への人的補助が全くないこと 流動で出た教官の負担を、講座に残った教官が補わなければならないのでその負担は倍増する(中沢)

8. 流動中、学生をとれないこと

学生、特に大学院学生をとれなくなることであろう。現在の大学の研究は大学院生の労働力に頼っているとと言っても過言ではないと思う。労働力の減少は直ちに研究の規模の減少につながる。従って、多くの学生を抱えている研究室は流動することはほとんどできないであろう(佐藤)

大学のポストを使用する事、このため少ない教官数の研究室は運営できなくなる。また、大学側の理解がないと連続して大学院生をとることが事務上できない(上野)

9. 周囲の人が制度を知らない

制度自体が殆ど知られていないこと(細野)

10. 動かない方が得という日本の社会システム

これまでの日本の社会では所属が変わるとメリットが少ないというシステム(細野)

11. 大学のポストを使うこと

大学のポストを使用する事、このため少ない教官数の研究室は運営できなくなる。また、大学側の理解がないと連続して大学院生をとることが事務上できない(上野)

12. 大学改革の進行と矛盾が生ずる

ポストは分子研にあるのではなくて大学のポストを2年間分子研に移すわけですから、大学改革が進行中の大学からは流動ポストの手当が困難だと思います(新名主)

13. 四年生の流動が認められない

学生の移動に伴って発生する諸問題。4年生の流動が認められない。修士課程の学生は1年しか委託院生として移動出来ない。学生の旅費、滞在費が手当出来ない。(三島)

14. 中途半端な予算・年限

深刻な問題とは具体的に何をさすのかわからないが、人が集まらないということが深刻な問題の一つとするならば、それは制度が中途半端であることであらう。一番大きい問題は中途半端な予算と中途半端な年限と本務校の義務ではないでしょうか。三番目の問題はなかなか難しいものがあるが、前者2つは解決できると思われる。即ち、誰もが参画したくなるような魅力が必要であらう。何の障害もなく一つのプロジェクトに集合出来る態勢が出来上がれば日本の研究はもっと素晴らしいものになると思われる(増田)

15. 流動に対する消極的な姿勢

いくつかの問題点を上に挙げたが、これらは流動で分子研に来る前から予想していたものである。全体としては、プラスの面がはるかに大きく、充実した研究生活を送ることが出来たと思っている。消極的な姿勢こそが問題点を増やすような気がする。(この項では、制度上の問題点を挙げるべきだとは思いましたが、それは他の方から沢山出てくると思いますので、答えにはなっていないかもしれませんが上記のようなことを書かせていただきました(塩谷)

7) 流動制度を維持し発展させる為には、どのような制度上の改革が必要とお考えですか。

1. 大学における人的・時間的ゆとりを保障する政策的変更。流動元への非常勤講師の予算配分。流動ポストを作る。流動しやすい環境整備

大学は年毎に人員と経常研究費の削減を強要されている。その結果、流動制度により研究者を派遣する余裕はますます減少している。大学における人的・時間的「ゆとり」を保障する政策的変更が必要であると考え(伊吹)

流動元に対する非常勤講師などの予算配分を確約すること(林)

流動元大学に臨時的スタッフを補充すること(川泉)

流動ポストには分子研のポストをあて、流動元はその間空きポストを利用して、臨時的職員を採用して流動された先生の穴埋

めにあてる(新名主)

流動元にも何らかの利益のあるような方策、例えば非常勤講師あるいは学振研究員枠を優先的に割り振る(三島)

大学側からポストを吸い上げるのではなく、流動(任期)ポストを作っておき、そのポストについた結果の空きポストを利用して併任教授となる。(上野)

転出元での学部講義人員をどう補充するかの問題(臼井)

流動元への援助(福田)

分子研の方で流動部門の先生が、流動元での講義や研究指導がやりやすい様に経済的にサポートする(新名主)

流動元にmeritを与える。(研究費が最も良い(池田)

流動元の研究室のサポート(非常勤講師、研究員の拡充(塩

谷)

流動元への人的補助 具体的には、例えばポスドクを1~2名流動元へ付ける様な制度を設ける(中沢)

大学も大講座制を形式的にはではなく、実質的に採用し、流動しやすい環境をつくる(新名主)

今の制度では、流動した研究者以外に直接的なメリットがない。特に、donar側は単なる被害者と思われることが多い。導入によってdonar, acceptor双方に直接的なメリットが入るように制度を改める必要があると思う(武居)

2. 学生への経済的援助増。宿舍の建設

学生への経済的援助(新しく岡崎に下宿を探す場合の援助、流動元残留学生への旅費、滞在費援助(植田)

学生用宿舍の建設(植田)

学生の岡崎滞在をよりやすくする方策(学生寮?)(福田)

研究分野によっては、実験を行う学生なしでは研究の進展が大きく遅れる分野もある。従って、流動元の学生の移動を容易にするように、授業単位の問題・住居問題を解決することの必要性を感じる。さらに、流動講座にも、2年限りのポスドクをつけ、流動期間中に研究を推進する力とすることが出来るようにすることを望む(水田)

学生の移動に対する経済的支援(澤田)

学生移動のための資金援助(流動教官として移動しても、1人では実際問題として研究ができない。かといって、分子研で新たに学生を受け入れたら、IMSフェローがすぐ採用できるわけではない。2年間という短期間で研究成果をあげるには、どうしても流動元から数人の学生を連れて来ざるを得ない。そのための資金援助を制度化する(中沢)

流動元での集中講義が出来るようにする(併任扱い)、学生の単位の認定が流動元でも出来る様に(丸々2年間)、委託学生への奨学金の補助(稲永)

流動先で十分な研究成果をあげるためには人の確保が最重要と考える。ポスドクなどの研究員を採用できるようにする。流動元の学生を連れてきやすくする。(経済面、単位互換をflexibleにする。例えば、薬学部の場合、単位取得上、修士の学生は連れてこれない(塩谷)

3. 大学院生を分子研でとれるようにする。流動元との単位互換

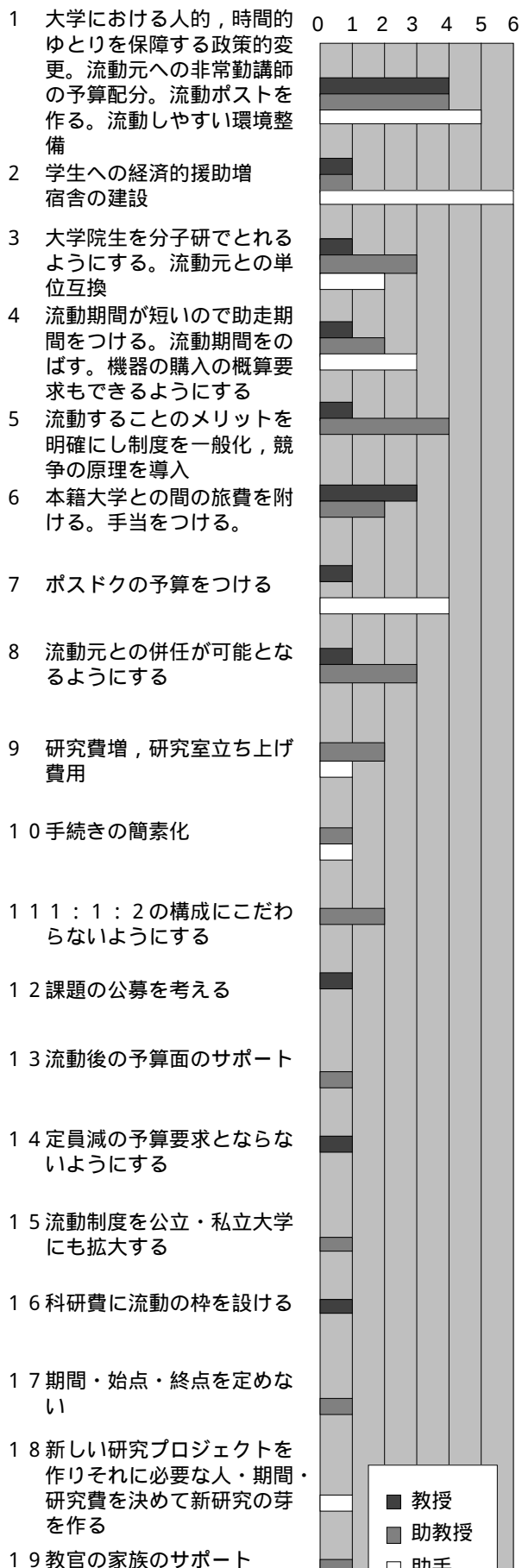
大学院生を分子研で取れ、一緒に研究できると良い。一緒に研究したい人と共になれば、すばらしいと思う(木村)

学生(特にMC)について流動元大学との単位互換が可能となることが重要である(成田)

流動元での集中講義が出来るようにする(併任扱い)、学生の単位の認定が流動元でも出来る様に(丸々2年間)、委託学生への奨学金の補助(稲永)

研究分野によっては、実験を行う学生なしでは研究の進展が大きく遅れる分野もある。従って、流動元の学生の移動を容易にするように、授業単位の問題・住居問題を解決することの必要性を感じる。さらに、流動講座にも、2年限りのポスドクをつけ、流動期間中に研究を推進する力とすることが出来るようにすることを望む(水田)

大学院生の積極的な受け入れとその体制作(川本)



流動先で十分な研究成果をあげるためには人の確保が最重要と考える。ポスドクなどの研究員を採用できるようにする。流動元の学生を連れてきやすくする。(経済面、単位互換をflexibleにする。例えば、薬学部の場合、単位取得上、修士の学生は連れてこれない)(塩谷)

4. 流動期間が短いので助走期間をつける。流動期間をのばす。機器の購入の概算要求もできるようにする。

流動の期間が短いこと。流動という制度上2or3年が限度であると思う。そこで準備の助走期間2年位の を設けてはどうか。長期的に準備をして、機器の購入についての概算要求などがあって良い(松島)

2年間という研究期間は短い、元の研究室及び周りの研究室への負担を考慮すると、延長も難しいと思う。そこで、分子研での研究室の立ち上げのための準備期間を分子研への配属前に別枠でとっていただけると助かる。(浅尾)

助手レベルの2~4年の流動があつてよい(松島)

半年位前からの研究体制(装置等の契約の先取り)の確立(黒田)

期間の問題。2年間でよいのか?場合によってはもっと長期はどうか?あるいは短期流動ということで一つのテーマで1年間やるというのはどうか?(福田)

もう少し期間を長くして、まとまった研究ができる方が好ましい。しかしながら、長期間ポストを動かしてくれるところがあるとは考えにくい。また、現在のように制度上は常駐のみが許されているにもかかわらず非常駐が多くを占める形でいつまでも維持するのは難しいでしょう。制度上で認める、もしくは完全に常駐とした方がすっきりして良い(松本)

5. 流動することのメリットを明確にし制度を一般化、競争の原理の導入

流動制度の一般化(細野)

そのためには流動することのメリットが明確である必要があり(細野)

流動教官しか持ち得ない恩典を与え、今よりは競争の原理を導入すべきだ(吉川)

その他、流動することにより研究者にとって大きなメリットが生じる様な多くのインセンティブを準備すべきであろう(成田)

流動によって短期間(2年間)に成果を挙げるには十分な研究費が必要である(御厨)

条件を非常に魅力的なものにし、だれもが参画したくなるようにしていただきたい。現在の科学技術事業団がやっているようなものにしてはいかがでしょうか。そうすれば、本当の意味の公募制が実行出来ると思われれます。その場合、全国の大学全てが流動講座をもつことが出来る体制が先有効と考えます。学生の参加なしではやっていけないことなので、せめて彼等の本務校からの出張費用等をみていただければありがたいです。或いは、非常勤職員等で雇うようなことができれば、学生もいやがらず参加してくれると思われれます(増田)

6. 本籍大学との間の旅費を付ける。手当をつける。

本籍大学との間の旅費を付ける(松島)

流動元への出張旅費。私は毎週流動元に授業に行っていたが

その旅費はどこからも出なかった(福田)

少なくとも、流動元と頻繁に往復できるだけの旅費をつける(木田)

学生にも旅費、引越の費用をつける(木田)

流動教官に特別旅費を支給する(川泉)

7. ポスドクの予算をつける

ポスドクの予算をつける。助手は必ずしも必要でない(上野)

研究費の面での優遇措置、IMSフェローのような非常勤講師枠の割当。助教授・助手だけでも流動部門が設置出来る(教授の定員振替は一般に困難を伴う)(三島)

研究分野によっては、実験を行う学生なしでは研究の進展が大きく遅れる分野もある。従って、流動元の学生の移動を容易にするように、授業単位の問題・住居問題を解決することの必要性を感じる。さらに、流動講座にも、2年限りのポスドクをつけ、流動期間中に研究を推進する力とすることが出来るようにすることを望む(水田)

ポスドク制などによる援助(流動元、流動先ともに)(黒田)

教授だけあるいは助教授だけだと行ってもなかなか仕事は進めにくいと思うので、(助)教授+IMSフェロー(1,2名)の形で行けるように。(川本)

流動先で十分な研究成果をあげるためには人の確保が最重要と考える。ポスドクなどの研究員を採用できるようにする。流動元の学生を連れてきやすくする。(経済面、単位互換をflexibleにする。例えば、薬学部の場合、単位取得上、修士の学生は連れてこれない)(塩谷)

8. 流動元との併任が可能となるようにする

元の大学で併任にならないと、研究室で学生が事務的にとれないことになる(上野)

流動元での集中講義が出来るようにする(併任扱い)。学生の単位の認定が流動元でも出来る様にする(丸々2年間)。委託学生への奨学金の補助(稲永)

特別な空席ポストを利用しなくとも流動元との併任が可能となる様に必要がある(成田)

学生(特にMC)について流動元大学との単位互換が可能となることが重要である(成田)

出身大学との研究、事務的(教授会、学科会議も含め)交流をより強くする(澤田)

9. 研究費増、研究室立ち上げ費用

流動によって短期間(2年間)に成果を挙げるには十分な研究費が必要である(御厨)

実験系では必要に応じて装置類の移動に係る費用が支弁される様に予算面での改善が必要(成田)

研究費の面での優遇措置、IMSフェローのような非常勤講師枠の割当。助教授・助手だけでも流動部門が設置出来る(教授の定員振替は一般に困難を伴う)(三島)

更なる資金面での援助(黒田)

移動に伴う備品等の移動、研究室を立ち上げる費用をはっきりとした形で付けること(臼井)

10. 手続きの簡素化

手続きの簡素化(西尾)

手続きの簡素化(概算要求による定員の振替を行わなくても済むような制度、希望者を公募出来るようなシステム)(三島)

11. 1:1:2の構成にこだわらないようにする

1:1:2の構成にこだわらないように出来ないか。例えば012、003のような構成が出来るよう柔軟性をもたせる(池田)

研究費の面での優遇措置、IMSフェローのような非常勤講師枠の割当。助教授・助手だけでも流動部門が設置出来る(教授の定員振替は一般に困難を伴う)(三島)

12. 課題の公募を考える

分子研の計画の大枠の中で、課題の公募を考えてはどうか。何を問題とし、いつ、誰が何をやるのか鮮明になる。これがclearであれば、予算等も考えやすくなる(川副)

13. 流動後の予算面のサポート

流動後数年間の予算面のサポート(西尾)

14. 定員減の予算要求とならないようにする

流動で人を出すことで、流動元が定員減の概算要求とならないようにすること(吉田)

15. 流動制度を公立・私立大学にも拡大する

現在は国立大学の教官しか流動が認められていないと思いますが、これを公立、私立大学まで拡大する必要があると思います(新名主)

研究分野によっては、実験を行う学生なしでは研究の進展が大

き遅れる分野もある。従って、流動元の学生の移動を容易にするように、授業単位の問題・住居問題を解決することの必要性を感じる。さらに、流動講座にも、2年限りのポストドクをつけ、流動期間中に研究を推進する力とすることが出来るようにすることを望む(水田)

16. 科研費に流動の枠を設ける

例えば、科研費にそのための枠を設けるとか、一つや二つの流動枠ではなく、枠を拡げ、20%ほどのメンバーは原則として、流動でまかなうとかの改革が出来ればと思います。受入れ側、出す側の両方にもう少し選択の巾が出来るべきだと思います(久司)

17. 期間・始点・終点を定めない

期間、始・終点を定めない。0.5年、1.5年というような期間で運用出来ないか。(池田)

18. 新しい研究プロジェクトを作りそれに必要な人・期間・研究費を決めて新研究の芽を作る

まず、新しい研究プロジェクトを作り、それに必要な人、期間、研究費を決めて新研究の芽を作るようなやり方が出来ないか(池田)

19. 教官の家族のサポート

教官の家族のサポート(旅費、手当)(塩谷)

8 概算要求に伴い流動元での集中講義が可能な非常勤講師枠の要求が考えられますが、これについてどのようにお考えですか。

1. 必須、非常に良い

講義の担当を続けた(負担が小さい(半期1/3コマ)ので)、一般的には必須のように思う(川副)

関係者の合意を得るための最大の問題は「教育の負担を誰が受け持つか」ということを解決することであった。流動元の大学に非常勤講師枠が保障されることは是非とも必要であると考え(伊吹)

まさにこれが必要不可欠である(林)

是非実現の方向で推進すべきである(三島)

当然の要求かと思います(増田)

流動性を維持する上では必要不可欠に近いことと考えられる(櫻井)

非常勤、ポストドク等で援助しないとだれも参加しなくなるのではない(黒田)

流動元の教官の講義の負担はかなりのものなので、賛成である(塩谷)

流動教官が流動元へ講義に行かなければならない状況は十分考えられる。その講義を集中講義でまかなうのは1つの解決策ではあるが、そのために流動元の他の先生の非常勤講師枠をあてがってもらうことに、必ずしも賛成は得られない。概算要求で非常勤講師枠が得られれば、流動元へ迷惑を掛けずにすむので、実現して欲しい事項である(中沢)

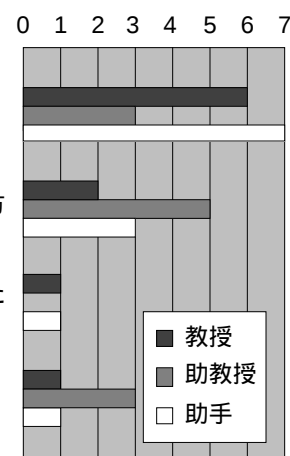
流動元に残した研究室学生の指導、新しく配属学生を確保するため学生への講義の必要性など、非常勤講師枠を新しく確保できれば、非常によい。幸いにして、私の場合は従来の非常

1 必須、非常に良い

2 一つの良い案・あった方が良い

3 できれば良いが、大した改善にはならない

4 意味がない、不要



勤講師枠を確保できたため非常に助かった(植田)

大変良い制度で賛成です(武居)

非常勤講師枠の拡大は大いにやって欲しい(吉川)

これは是非必要です(木田)

流動元の負担を考えると、是非実現して欲しい(水田)

まったく賛成である(稲永)

是非このことは実行して欲しいと思います。例えば、併任で流動となった場合には、旅費の出所がなく、個人の負担は膨大となります。講師枠があれば随分自由度が増え、流動への出勤にも助けとなると思います(久司)

2. 一つの良い案・あった方が良い

一つの案です(松島)

できたら良いと思う(佐藤)

あった方が良く(上野)

これにより流動制度が維持し、発展する可能性が高くなるならば意味がある(御厨)

教育効果を考えると集中講義でない方が良くと思いますが…。これは流動元ではなく、分子研独自でという事だという理解が正しければ是非推進して頂きたいと思います(新名主)

進めるべきである(澤田)

確かにばつばつと流動元に戻るより、集中講義という形で戻ればよいと思う(川本)

講義が流動のネックである場合には有効でしょう(吉田)

何らかの形で学部講義を継続させるための制度を考えるべきだと思います。(臼井)

非常勤講師として対応することも一方ではあるが、教授、助教授の場合、大学院生の指導上の問題から、流動元での併任が可能となる様な制度とする方法の方が流動教官自身および流動元教室の理解は得られやすい(成田)

3. できれば良いが、大した改善にはならない

非常勤講師枠などは大した額ではないので、むしろ、学振の特別研究員枠(PD枠が望ましい)を1~2名分確保していただければ、格段の援助となる。学生実験、卒業研究の指導など実際の労働力としても大いに助かる(福田)

ある程度効果は期待出来るが、根本的解決にはならない(池田)

4. 意味が無い、不要

できればいいと思いますが、現状では大した改善にはならないでしょう(細野)

余り意味がないように思われる(西尾)

あまり役立つとは思えない(木村)

大学院生を加えていると流動元大学の「兼任教官」となるのではないのでしょうか?それでは非常勤講師にはならないのでは?(川泉)

流動先では研究に専念するべきだと思います(浅尾)

9 流動制度を全国の大学や研究機関にも導入すべきだという意見がありますが、これについてどの様にお考えですか。

1. 賛成、任期制・人事の流動の視点から導入すると良い

ポジションの任期制という視点から導入したら良いと思われる(上野)

大学・研究所において、今後の研究の進展には、人事の流動化が不可欠となる。任期制の厳密な適用が疑問視されるとするならば、流動制度は是非導入すべき制度であると考えます(植田)

特に若い研究者にとって、より流動的になるのは望ましいことと考えるが、多くの大学教官あるいは研究者の同意が得られないまま、強制的に導入するのはどうかと思う。多くの研究者が流動的にならない限り、行き場を失ってしまう人が必ず出てくるのではないのでしょうか。また、ある程度、生活の保障がないかぎり、大学に残る人、あるいは博士課程に進学する人さえも減少すると思う(川本)

いいことだと思います(浅尾)

現状では困難と思うが、数多くの大学、研究機関がお互いに交流しあうことになればポストの問題などもなくなり良い方向に進むと思う(松本)

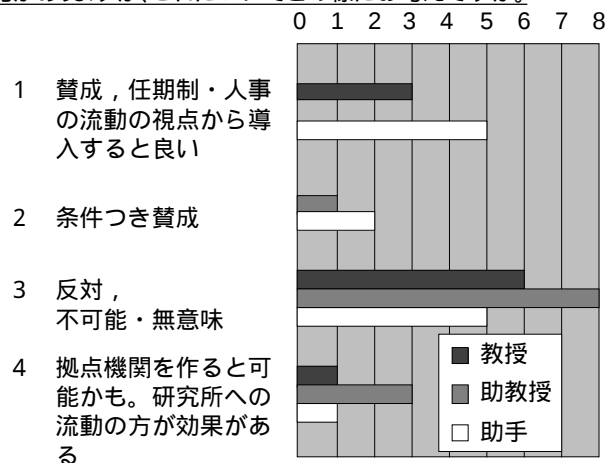
全く賛成で日本の閉鎖的な研究社会を開放する有力な手段と思う。しかし実際には多くの問題があり、急激に導入すると色々な摩擦を生ずるだろう。導入することによってその機関が大いに得をするように制度を作るのも一策である(武居)

導入すべきである。定員の2~3割を流動に当てる等、思い切った措置が望ましい。これを推進することにより研究者・教官の流動性が高まると同時に、研究の評価・自己点検が期待できる(三島)

是非導入すべきだと思います。研究費が集中的に投入されるようになりつつある今、人の方も集中的に活用出来るよう、そのような工夫が必要かと思います(久司)

賛成。非常に良い制度だと思います。但し現行のやり方では定着しない(池田)

2. 条件つき賛成



流動に伴う種々の負担を軽減し、研究上のメリットを増やす方向に改善していけば、流動制度を広げることは賛成である。但し、現在の状況で一気に全国に広げるのは無謀である。人的サポート、経済的サポートが現在の流動制度において確保されてから、次のステップに進むべきである(塩谷)

その前に流動制度の持つ欠点(例6.7)を改善し、より良い研究環境を整える必要があると思います。流動制度は一度始めると半永久的に継続すると予想されますので、それぞれの研究分野が持てる流動部門の数には限度があると思いますし、また、活発に研究活動している分野でない流動の魅力も減少して長続きしない様な気がします(新名主)

上記の問題点や制度が整えば、もう少し広げても良いと思う。但し、流動先研究機関に魅力があることが絶対条件であり、どうしても研究機関は限られて来ると思う(稲永)

賛成です。ただ、機器類等の充実から見て、プロジェクトがまた旧帝大クラスへ集中し、その結果、予算が旧帝大クラスに集中する可能性がある。また、現在の大学院の重点化がその制度

の足を引っばると思われる。予算が現在の旧帝大クラスに流れる現象に歯止めをかけなければ実現は出来ないと思われる(増田)

3. 反対、不可能・無意味

むしろ、サバティカル制を導入し、その間異なる研究機関に滞在し、リフレッシュするシステムができればいいと思います(細野)

反対。流動の受入機関にはそのなりの実力が必要(川副)

無理である。多くの地方大学や私立大学の教員の忙しさを知るべきである(御厨)

今のような状況では賛成できかねます(木田)

人(研究室)が移動することによる金銭的、時間的損失がすべての大学で十分に補えるかどうかが重要な問題かと思います。また、本来独立した問題である定員削減と流動転出がLinkされて取り扱われてしまう傾向にあるのも問題だと思います。(一部の大学かもしれませんが)(臼井)

受け入れることが可能な機関は数少ないと思う(松島)

現状のままで、研究機関については分からないが、大学では不可能であると思う。それは、予算面、実験室、設備が十分整備されていないと思うからである。また、任期制が軌道にのれば流動制度の必要はなくなるとされる(林)

分子研以外では流動部門を受け入れる余裕のある所はほとんどないであろう。また、多くの流動部門の受け皿がたどえだとしても、流動できる研究室が少ないのでは意味がない(佐藤) 研究の活性化という点では流動する人にとって良いが、流動を出す側は人や予算の面で不利益を被り、運営上で問題を残すので現状のままで難しいように思われる(西尾)

分子研のように、UVSOR施設が利用できることや、一流の研究者ばかりで構成されていること、大学に比べ予算が多くとれることなど、魅力が大きい研究所では、流動制度を維持できると思います。しかし、そうでない施設での流動制度には需要があるとは思えない(野々垣)

流動元となることに対する理解は得られ易くなると考えられるが、一般の大学に流動部門ができたとして、分子研のようにそこに人を集められるような魅力が出せるかどうか問題(吉田)

流動者と流動先が共に相手を必要とするとき、流動制度ではうまく行く。毎回そうとは限らないので、制度化するのは無理ではないか(木村)

negativeな面をある程度カバー出来るようにするのが先で、さもないと名目的流動しか行えないと思う(川泉)

流動教官に対して、十分な支援体制を有する組織以外にこの制度を導入することには多くの疑問が残る。また、特別の分野に特化した研究組織以外では流動することの意義は乏しい(成田)

10) 分子研の流動制度に対するご意見があれば、お聞かせ下さい。

1. がんばって続けてほしい

流動制度を維持することは大変なことです、頑張って続けて下さい(佐藤)

分子研にはUVSOR施設はもとより、良い実験施設があり、それ

分子研のように恵まれた条件でも多くの問題が含まれているのに、全国の大学に導入するのは、根本的な改革がない限り無理と考える(澤田)

現状の状態でいっても流動のメリットが何であるか明瞭でない。単に流動するだけでは、研究体制が確立していない(不安定である)ため、ほとんど意味がないと思う。研究体制、援助体制が確立した状況で導入すれば研究・人的交流が可能となり、大変意義深いシステムと考える。重点的に特定の機関で行うべきで、全国的に行えるとは思えない(黒田)

必ずしも賛成とは言えない。流動制度を否定するものではないが、全国の大学や研究機関の恒常的な制度となったとき、「受け入れ側」と「派遣側」の研究条件・状態の格差拡大を助長することが危惧される。これは結果的には流動制度の維持を困難にするのみならず、全体としての研究レベルの発展につながるとは思えない(もちろん、部分的な発展は期待される)(伊吹) 経費と研究面でどれだけメリットがあるか?大学の活性化をはかる目的であれば、分子研のように上へのpromotionを全国の大学でなくしたら、任期制などよりはるかに良くなるであろう。教授は5年毎に評価を行う(福田)

4. 拠点機関を作ると可能かも。研究所への流動の方が効果がある

全国をブロックにわけて、拠点機関をつくと可能かも知れない。大学への流動より、研究所への流動の方が効果があると思う(松島)

大学にまで範囲を広げると内地留学との区別がつきにくくなるので、研究所などに止める方がよい。もっと多くの研究所等に流動制度を導入して欲しいと思っている(吉川)

大学間での相互の流動は、地方の大学には考えられず、流動先が一部の大学だけに集中することになる。現在の大学での研究環境において、そのような集中する人材を受け入れることは、物理的に不可能と思われる。従って、その役割は、研究所に相当する機関が担うべきだと考える(水田)

分子研のような流動制をそのまま持ち込む、あるいは拡大する根本的な流動制を高めるようなシステムにすることが先決(櫻井)

分子研は、他の大学に比べて研究スペースが比較的豊富であるので、流動教官にかなりスペースを提供できる。しかし普通の国立大学では、それだけでなくともスペース不足に悩んでいるので、新たに流動教官を受け入れて研究してもらうためのスペースを確保するのは、はっきり言って不可能。この問題が解決できるなら(そう簡単に解決できるとは思えないが)、教官の流動性を高めるという点においては、全国的に流動制度を取り入れることには賛成(中沢)

らを運営するシステムも大学とは異なり開放的であり、かつ効率的であると思います。研究以外の面でも分子研には学ぶべき点が多くあり、流動制度の意義は大きいと思います(野々垣) 分子研の流動制度は貴重な制度であると思いますので存続さ

せて下さい。但し、流動制度が余り知られておらず(特に事務サイド)応募がそれ程容易でないこと等少々の問題は感じていますが、基本的には流動制度は発展させるべきであると考えます(植田)

流動制度は長い目で見て、日本の学術交流を推進する役割を担って来ており良い制度であるので是非存続させて欲しい(御厨)

分子研の流動制度につきましては経済的にも恵まれており非常に良い制度だと思います。(臼井)

個人主体の研究者や、特定の大型装置を利用する研究者にとっては好ましい制度であろうと考え(成田)

よく機能しており是非続けて頂きたい。単に研究のみならず、研究所の運営の在り方や事務局及び技術課との実質的で優れた研究協力体制など学ぶべき点が多くあった(稲永)

2. 大変楽しかった。良かった。良い制度である。

流動する人にとって良かった点がたくさんあり、良い制度と思われる。更に、7)の点を取り入れることができれば非常に良い制度となるように思われる(西尾)

流動教官となって個人としては大変楽しかった。分子研に深く御礼申し上げます(川泉)

いろいろの問題はありますが、このように建設的な試みが実行に移され、運営されて10年以上の実績を積まれた事は素晴らしいと思います。これは、分子研の活力を示す一つの成果だと思います。2年間と期間が限られているため、運営などに参加する場が限られがちで、その分、本務の方々に負担をかけてしまいます。本務の方々の、この制度への理解と支援があればこそ心から思います(久司)

大変よい制度と思います。7)に書いたような運用に柔軟性をもたせて、今後も継続させることを望みます。但し、現行のままでは効率も上がらないし、人も見つけられなくなるのではないのでしょうか(池田)

私にとっては大変プラスになり、貴重な2年間であったと思います。したがって、流動制度は是非とも続けて頂きたいと思いますし、特にこれから仕事を発展させようという若い研究者が、数多く行けるようになればと思います(川本)

3. 流動後のサポートを希望、客員など

流動後の客員教授制度は残しておくべきと思う。2年間でやった研究の継続があとの2年間の客員でより完成に近づけることを実感した(豊田)

4. ポスドク採用の費用をつける

分子研側のサポートに感謝している。ポスドク採用のための予算を付けるべきと考え(上野)

流動の時期に合わせて、博士研究員を付けて欲しい(新名主)

5. 流動の準備期間を設けて欲しい

流動前に準備期間として、半年から数カ月の範囲で予算執行の可能なポストを用意して欲しい。赴任した後、実験を速やかに立ち上げるために必要な物品を揃えておくことの必要性を感じた(水田)

予算の、半年前からの援助、人的援助の体制をつくらないと研究の立ち上げに時間がかかり、2年間の流動期間中に研究が

1 がんばって続けてほしい

2 大変楽しかった。良かった。良い制度である。

3 流動後のサポートを希望、客員など

4 ポスドク採用の費用をつける

5 流動の準備期間を設けて欲しい

6 流動を(客員の数程度に)増やす

7 流動元と分子研の間の単位互換制度を作ってほしい

8 流動元の抜けた穴を埋める解決をする

9 制度が形骸化している。無い方が良い

10 流動を大部門化し、公募による課題の明確化をはかったらどうか

11 流動元に対する理解の促進

12 若い人ほどメリットが多い教授は困難

13 大変な努力でやっておられるが、社会全体への影響は残念ながら小さい

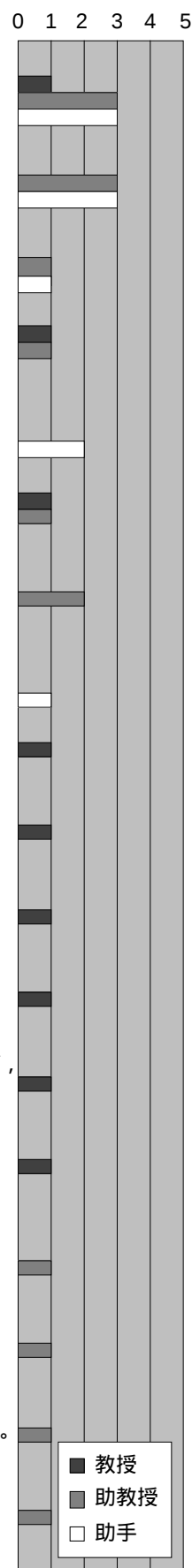
14 流動を定員化せよ

15 学生の寮を建てて欲しい

16 主幹の先生に感謝

17 分子研に修士課程があるとよい。学生を連れてゆける

18 流動教官でも総研大生の受け入れが出来るようにする



進展せず、流動した人々にとってメリットがない(黒田)

6. 流動を(客員の数程度に)増やす

客員の数程度に流動を増やすこと(松島)

7. 流動元と分子研の間の単位互換制度を作してほしい

将来的には博士課程の分子研と大学の単位互換制度をつくって欲しい(新名主)

大学院は総研大(DC)のみであり、MCの学生を指導している教官にとっては、全て単位等を出身元の大学に頼らざるを得ず、多くの不都合な問題を生じる(成田)

8. 流動元の抜けた穴を埋める解決をする

流動制度自身に興味を持っている研究者は多いと思うが、大学教官では流動で抜けた穴を誰が埋めるかで、抜けられないという事態が生じる点、これをなんとか解決できれば、希望者が殺到するのではないかと思う。私自身も機会があれば何度でも流動したいと思う(林)

9. 制度が形骸化している。無い方が良い

流動制度が悪く言うところ形骸化していたこと。制度があるが運用して(もっと強く言うと、本当はない方がよい)感あり(川副)

10. 流動を大部門化し、公募による課題の明確化をはかったらどうか

双方にとって良いということは現実にはなかなか困難だが、流動を大部門化し、教授、助教授(場合により助手一人でも良い)、ひとり単位で考え、公募による課題の明確化をはかったらどうか(川副)

流動における種々の問題を解決し、応募者の中から選べるような魅力ある制度になればと思います(澤田)

11. 流動元に対する理解の促進

流動元に対する流動制度の理解の促進活動が必要(川副)

12. 若い人ほどメリットが多い。教授は困難

教授の流動は、実に困難が多い。若い人ほど、メリットが多いと思う(木村)

13. 大変な努力でやっておられるが、社会全体への影響は残念ながら小さい

大変な努力でよくやっていると思うが、社会全体に対する影響は残念ながら小さいように思われる。影響を増すためにはもっと仲間をふやす必要がある(武居)

14. 流動を定員化せよ

錯体に関しては流動は定員のないのを補うためにあるようなもので、定員化する方向に進むべきでしょう(木田)

15. 学生の寮を建てて欲しい

流動の間、一緒に行ってくれる学生のための寮を建てて欲しい(新名主)

16. 主幹の先生に感謝

主幹の先生のご厚情に感謝しています(細野)

17. 分子研に修士課程があるとよい。学生を連れてゆける

分子研(総研大)に修士課程があると、流動に合わせて学生を総研大に入れ、2年間一緒に研究して、また大学に戻る事が出来るので一緒に行ってくれる学生にもメリットが出てくると思います(新名主)

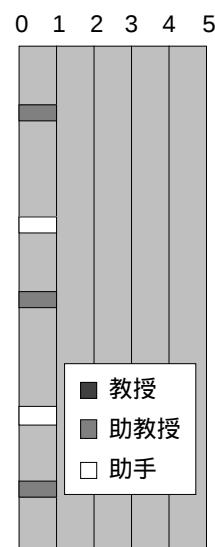
19 流動元大学との往復旅費を別枠で割り当てる

20 流動元の学生への研究費の援助など魅力ある制度にする

21 特別研究学生へのケアを大きくする

22 文部省からのサポートをもっと増やす

23 公立や私立大学からの流動を可能にする



18. 流動教官でも総研大生の受け入れが出来るようにする
流動教官は在任期間の関係上、総研大でDCの学生を受け入れることが出来ず、グループとして研究を行っている場合、大幅な人員の低下を来すため何らかの対策をとる必要がある。(例えば流動教官でも学生の受け入れを認めるなど)(成田)

19. 流動元大学との往復旅費を別枠で割り当てる

流動元大学との往復のための旅費を必要に応じて別枠で流動教官に割り当てることが望ましい(成田)

20. 流動元の学生への研究費の援助など魅力ある制度にする
本務校に学生がいる場合、流動元への研究費等による援助も考えていただきたい。立ち上げにかかる費用等も考慮していただき、研究費を潤沢にお願いしたい。本当の公募制でプロジェクトを組めるよう魅力あるものにしていただきたい(増田)

21. 特別研究学生へのケアを大きくする

いろいろな制限がある中で、よく維持できていると思う。特別研究学生に対するケアが十分でないので流動教官の研究が混乱する(櫻井)

22. 文部省からのサポートをもっと増やす

分子研の流動部門に対する人的サポート、経済的サポートは、分子研が可能な範囲で最善が尽くされていると思う。文部省からのサポートがもっとあって良いだろう。個人的には諸々の解決されるべき問題はあったものの、流動部門の2年間は、大変貴重なものであった。我々が、もっと多くの方が流動部門に魅力を感じられるよう、努力すべき点があるのかもしれない(塩谷)

23. 公立や私立大学からの流動を可能にする

現在は国立大学からの流動は認められておりますが、公立や私立の大学からの流動教官受入は制度的に認められておりません。流動制度の主旨から考えると、広く人材を受け入れることが大切に思われます。今回の行政改革を期に、今まで認められていなかった公立や私立大学からの流動が制度的に可能となるように、分子研が中心になり働きかけたいかがでしようか(中沢)